

次郎、菊池大麓の諸氏も、いづれも當時の我が學界を背負つて立つた人物ばかりであつた。但し、東京谷中の墓地には「故大學大博士佐藤尙中之碑」がある。この碑名の大博士も學位でなくて官名で、明治二年の官制による大學の教授のことで、大中小の三つの等級があつたのだ。

### 最年少の博士

最初の博士以來、最年少で博士を授與された人は、四五年前夭折した東大助教授小澤儀明氏であつた。氏は理學部地質學科を出て二年目に『西南日本の地質構造の研究』を完成して、帝國學士院から恩賜賞を授與されると共に、二十八歳の若冠で理學博士となり、東大助教授に任ぜられた。間もなく海外遊學の途に上つたが、病を得て歸朝し、前途多望な一生を若くして閉ぢてしまつた。かの明治文壇の天才高山樗牛を思はせるものがあるが、樗牛も若くして博士になつた一人であつた。赤門文科を出て五年目に、三十一歳で文學博士となり、異數の名譽として謳はれた。

最近では史學平泉澄氏が若くして文學博士になつた人であるが、それでも三十四歳であつて、樗牛ほど若くない。先頃、京大で理學博士となつた朝鮮の李泰奎氏は三十歳、近來のレコードとされてゐる。

### 博士絶對反對の人々

博士々々と、猫も杓子も博士でありたがる世に、博士になりたがらない奇人もゐる。死んだ文豪夏目漱石は、明治四十四年その帝大教授時代に、満場一致で文學博士に推薦されてゐたが、頑として博士にならなかつた。博士でないと帝大文科の教授になれなかつた時代に、漱石は新例を開いたわけだが、それ以來、漱石の聲望隆々として博士を幾つ足しても及びもつかぬ人氣を贏ち得てしまつた。

この漱石から愛された眞鍋嘉一郎氏も、現に東大醫學部教授で、故濱口前首相を鹽田博士と共に治療した名醫の一人だが、依然として醫學士で通つてゐる。これは別に漱石にカブレタのぢやない。眞鍋氏が帝大を首席で卒業して、ドイツに留學中、青木駐獨大使が留



學生一同を招いた晚餐會の席上「世界は實力本位だ、實力さへ養つておけば肩書や學位が無くとも大手を振つて通れる」と激励した演説に感激して、博士にならぬ同盟を友人數名とで持へたのださうである。眞鍋氏はその後、帝大物療科の無給講師として離伏すること十數年、遂に博士でない帝大教授に昇進したが、他の盟友は、いつの間にか皆破約して博士になつてゐたといふことだ。

早稻田の哲學者杉森孝次郎教授も博士反對論者で、論文を出せばいつでも博士になると勤められてゐるが、「おれは博士以上の存在だ」と、斷じて博士にならないさうである。

### 博士不用の人々

博士であり乍ら、一向に世間に知られてゐない人がある。つまり他の方面で餘りに有名であるがために、博士の學位をもち出すに及ばない人々だ。だからコレハと驚くやうな人が、案外立派に「博士」の所有者なのである。先頃死んだ政界の雷爺さん仙石貢氏が工學博士であつたり、水野鍊太郎、鈴木喜三郎、故江木翼氏等の政治家が法學博士であつたり

するのだ。前司法大臣で辯護士の原嘉道氏も法學博士であるが三井王國の總理大臣ともいふべき故團琢磨氏がやはり工學博士だつたのだからおどろく。仙石氏は鐵道の、國氏の鑛山の、押しも押されぬ權威だつたのである。

これらは皆、學位論文を提出して博士になつた人達ではない。舊學位令による推薦によるものだ。舊學位令では、あまり學殖はなくとも、役人で勅任官になつてゐる人なら、博士會か大學總長が推薦すると、よい加減の論文でも名譽的に博士にしたものだ。新學位令では學位請求論文を教授會が審査し、これをパスしなければ文部省は認可出來ない。

### 博士を二つ以上持つ人

一人で博士を幾つも持つてゐる人といふのは、案外少ない。三つ以上持つてゐる人は先づ無い。二つなら相當ゐる。法學博士農學博士に高岡熊雄（北海道帝大教授）、醫學博士と理學博士の松下禎二氏や額田晋氏、醫學博士と文學博士の富士川游氏や榊保三郎氏、理學博士と農學博士の松村松年氏、理學博士と工學博士の徳永重康氏らが、現存の人ではまづ



主な人々である。

### 新聞辭令の博士

國語調査會の花形で、國語學の權威保科孝一氏は、いつでも東京文理科大学教授文學博士の肩書を新聞でつけられてゐる。教授の方は確だが、實は博士ではない。國語學の大御所上田萬年博士とソリが合はないために、博士になり損ねた人だと傳へられてゐる。いつそ京都帝大あたりに論文を出せばよさうなものだが、保科氏にしてみれば同窓か然らずんば後輩に當る京大教授連に審査を願ふといふわけにはいかぬと見える。

元東京市教育局長で、現帝國教育會副會長の大島正徳氏も、新聞では常に文學博士だ。東大助教時代から新聞辭令で博士であつたが、これは氏の持味がどことなく博士らしいからなのであらう。

### 博士濫造

#### 學 界 人 物 傳

博士濫造の親玉は醫學博士だ。古い言ひ草だけれども雨後の筍より、もつと猛烈な勢で醫學博士が出来る。大正八年末に五百二人だつたのが、昭和四年末の十年間に三千三百人殖えて三千八百人になつた。昭和四年の一年間だけに四百九十八人の醫博が出来て、一ヶ月に七十何人、日に平均二人半づつの割合になつたが、昭和五年には醫博の學位論文提出者の數二千五百人に及んで、このうちパスした者は日に平均三人づつとなつた。京都帝大などは、その年度の醫學部卒業生數よりも醫學博士を出した數の方が多かつた位だ。現在どれだけの博士があるかといふと、舊新兩學位令を通じて昭和八年三月末までに八千六十九名で、その内譯は次の通りである。

醫學博士……………五九六三	法學博士……………二七〇	藥學博士……………八一
工學博士……………六三九	文學博士……………二七二	理學博士……………四五〇
農學博士……………二七〇	林學博士……………四九	獸醫學博士……………三四
經濟學博士……………三〇	商學博士……………九	政治學博士……………二一



## 博士の出し惜み

濫造の反対が學位の出し渋りだ。學位をケチ／＼するのでは文科が一番ひどい。東北帝大教授の石原謙博士にしたつて十數年前に大學院在學當時書いた哲學の論文を十年以上寝かせられて漸く博士になつた。東大教授を停年で近頃退いた常盤大定博士も、十數年間論文の置いてけぼりを食つた方で、忘れた時分に文學博士となり、弟子から『先生おめでたう御座います』と挨拶されて『名譽といふか、不名譽といふか、この年になつてイヤハヤ……』の悲喜交々の顔をしたとかいふ話である。

最もヒドイのは、曾て問題になつた山田孝雄氏（現東北帝大教授）の件だらう。明治三十七年に『日本文法論』を書いて東大文科に提出したのに、文科の物置きで、其の論文が埃と同居してゐるうちに、山田氏は刻苦精勵昭和二年に東北帝大教授になつた。すると大學教授の肩書に必要な『博士』がないので、山田氏に當局が論文を出しては如何とすゝめると『もう二十數年前に出してある』といふ返事、當局が驚いて調べると果して有つた。

## 大 學 評 判 記

そこで早速審査し、文部省は舊學位最後の適用として文部大臣の名によつて山田氏に『文學博士』を授けたのであつた。論文を出してから學位を貰ふまで二十六年！ 山田氏が學位授與を祝ふ門下生の前で、

『學位何ものでありませうか……』

と言つたとき熱淚滂沱として言葉を呑んだと聞く、さもありませんことではなからうか。

學位の出し惜しみは文學部だけではない。東大理學部にもこんな例がある。問題の人は數年前亡くなつた海軍大學校教授江口元太郎氏だ。江口氏の心血を注いだ研究エレクトレット（永久電氣）は學位論文として東大に提出したのであつたが、梨の礫で完全に黙殺された。江口氏は悶々の情をいだいて數年を送るうちに遂に病床の人となり、その死も近づいた頃、氣の毒だと運動する人があつてとにかく論文審査といふことになり、死の直前に學位は江口氏に届けられた。ところが昭和三年に長岡半太郎博士が歐米巡歴の途中ドイツに立寄ると、ドイツの第一流の電氣學者が長岡氏に、

『日本には驚くべき學者がゐる。エム・エグチのエレクトレットは世界的創見に充ちてゐる』



るものだ』

と激賞してやまなかつたので、長岡博士は歸朝早々調べてみると、これはしたり、大變な業績である。驚いた博士はすぐ江口氏の墓所を訪れて、今は冷かな墓石に長い黙禱を獻げたさうだ。

## 女 博 士

男女同權——

女性の學界への進出は、必然、女博士となつて現はれる。最初の女博士が、理學博士の保井コノ女史、東京お茶の水女高師の教授だ。次がやはりお茶の水の教授黒田チカ子女史の理學博士、三番目が女性として最初の醫博西村庚子女史といふことになる。續いて最近井出ひろ子女史も醫博となり、また理學博士に加藤せち子女史がなり、全部で五名を算するに至つた。まだまだ豫備軍が澤山控へてゐるから、文運の隆昌として慶賀しておかう。博士——それは、まだ、社會的な一つの魅力である。

## 秀才鈍才物語



## (一) 首席獲得争覇線上の人々

### (A) 帝大法科二十八年組と海兵二十二年組

有爲なる人材は、一日にして出来上るものではない。幸運もさう度々やつて来るものでもない。平素の不撓不屈の戦が、その人物を練り機会を掴ましめるものだ。人生は戦闘である。

こゝに語る首席獲得争覇線上の人々は、果して一點一分を争ふ蒼白の點取り蟲であらうか？

否！ 否！ 彼等の涙ぐましき努力、撓まざる意志そして正々堂々たる競争態度——  
げにかゝる學窓の優等生にして、はじめて社會の優等生たり得るのだ。若き胸に經世の志を秘めつゝ、黙々として燈火に書を繙く、しづかにして、かつ永き不斷の戦ひ！ それがあつてこそ、またその勝者であつてこそ、今日の成功と榮達とは、期待せられたの



であらう。

濱口か？ 小野塚か？ 下岡か？

明治二十五年は、東京帝大の法科に全國高等學校から、それ／＼粒選りの秀才が集つて來るといふので、大變な人氣を呼んでゐた。時あたかも國會開設の翌年である。國民の政治に對する興味は白熱的だ。青年學徒もまた未來の大政治家を夢みてゐる。赤門法科を登龍門として、秀才が集中するのも當然である。彼等の意氣込みと、彼等に對する世間の期待とは共に大きかつた。一高からは大擧してやつて來た。清野長太郎、小野塚喜平次、土方久徵、高野岩三郎、田原豊、矢作榮藏、小原睦吉、俵孫一、河村金五郎、中島滋太郎、菅原通敬等々の錚々たる連中だ。二高からは特待生を三年間續けたといふ田所美治が來た。三高からは幣原喜重郎、濱口雄幸、下岡忠治、伊澤多喜男等、既に名だたる逸才組が袖を連ねて乗りこんで來る。五高からは加藤本四郎といつて、彼が大學に入れば必ず他校出身者を壓倒して首席になるだらうと折紙をつけられてゐたスゴイのを出して來る。また、そ

の年に初めて卒業生を送り出した山口高校（これはその後廢校、現在の山口高校とは別）からはこれも首席折紙つきの上山滿之進がのりこんで來た。まさに群英尖端を争ふの壯觀！

この州郡の粹を抜いて赤門に集まつた連中が、いづれも明治二十八年に帝大を出て、故濱口首相を筆頭に、政界、學界、實業界にそれ／＼異數の出世を遂げ、『帝大二八會』と稱してゐることは既に何人も御存知であらう。だが、こゝには其の人達の出世ぶりを述べるのが目的ではない。

——で、話は首席争覇の線に沿うて展開する。一高か、二高か、三高か、それ／＼に母校を代表しての對抗だけに、新らしい角帽を冠つた喜悅よりも、これからの争覇意識でいづれも緊張し切つた面貌である。その頃の法科は、政治科と、獨法科と、英法科と、佛法科の四科に分れてゐた。政治科に入つた首席候補は小野塚喜平次、高野岩三郎、濱口雄幸、下岡忠治、獨法では久保田政周、豊島直通、英法では清野長太郎、土方久徵、河村金五郎、田原豊、田所美治、上山滿之進、幣原喜重郎の人々だつた。中でも最も人數の多い政治科



と英法科とに秀才も多く集り、人氣も湧くが如きものがあつた。

政治科でいへば、一高の小野塚喜平次と、三高の濱口雄幸とが、最も恰好の取組みだつた。小野塚は今の東大總長小野塚博士その人である。雪深い越後在から出て來た神童、色は生白いが、理智に澄んだ冷徹の瞳は、非凡なる頭腦の冴えを思はせる。

濱口はその嚴めしい顔貌が、當時にあつて既に一異彩であつた。重厚にして悠々迫らぬ態度、しかも南國的情熱を湛へて大きく構へてゐるところは、級友のひそかに畏敬する人物であつた。頭腦も緻密、そしてなかくの勉強家である。濱口か、小野塚か、の呼聲は漸次高くなつてゆくのも無理はなかつた。

小野塚の勉強法は本格的なものであつた。副ノートをつくつて、大綱を書き抜いたり、参考文献を涉獵して、研究資料を豊富にしたり、用意到らざるなしである。それでゐて、イザ試験といふ日になつても平日と何ら變りなく夜の十時が來ると、ラムプを消して就寢する。が、相當神經質な彼は、一たび精神の凝集された緊張から脱することが出來ず、容

易に眠りにつかなかつたとみえ、一段と蒼白い顔で試験場に現はれるのが常だつた。

濱口も、その顔に似合はず非常に生真面目な勉強振りで、一事をも苟くしないといふ風であつた。母校三高の名譽にかけて、決して不覺をとるまいとの意識が強かつたとみえ、實によく頑張つたものである。勉強に疲れると庭に出て、夜空の星をかぞへるのがその頃からの習慣であつた。彼には、どことなく強い反面に、デリケートな情緒的部分があり、二六時中ノートと首ツ引きではなかつたのが何となく餘裕綽々として心強く思はせた。夏の休暇に歸省して、土佐灣に舟を泛べ、大學なんかやめて、心機一轉して宗教家にならうかなどと、眞面目に考へた青年であつた。

下岡忠治は濱口の親友で、二人はよく机を並べて勉強したものである。下岡が後年朝鮮政務總監として病歿した時、三高以來の親友を失つて、ライオン濱口の眼にも滂沱たる涙があつたのは世間周知のこと。下岡の勉強は、全くの嚙りつき主義で、その猛烈な勉強ぶりは何人も驚嘆してゐた。ウツカリすると下岡が首席になるんぢやないかと噂されたものだ。



一高から來た高野岩三郎は豪快にして俊敏、濱口の向ふを張る立役者であつた。勝田主計は首席争覇戦の圏外に超然として文科の正岡子規と共に俳諧や文學談に耽つてばかりゐた。後に文部大臣となつても、トリストを自分で焼いて晝飯にしてゐた氣輕さがこの時分から出てゐたものであらう。

伊澤多喜男は三高時代から精悍氣鋭、頭腦の冴えで級友を畏れしめてゐたが、大學に來てからは餘り勉強しなかつた。友人が事情を探ると、苦學をしてゐたので、疲れて書物も讀めなかつたのださうだ。

英法科は群雄割據だ。中で最も注目せられてゐたのが清野長太郎であつた。一高時代から未曾有の駿才と謳はれたゞけに大學に來てもその秀才ぶりは精彩潑刺としてゐた。秀才といつても彼は決して學校秀才型ではなく、頗る氣魄に富んだ切れ味の冴い冴え方だ。後年知事として大臣を壓倒する概を見せたり、滿鐵理事としても手腕を揮つた男ぶりをその頃から髣髴させてゐた。復興局長官に在職中病歿したのを惜しまれてゐる。

豪傑といへば九州から來た加藤本四郎は文字通り豪傑タイプの秀才だつた。成績に拘泥せず、酒ばかりのんで頗る奔放な生活をしてゐた。それでも粒選りの秀才連に交つて一歩も譲らぬ頭の明晰さは、流石五高が折紙づきで送り出したゞけはあると首肯出来るものがあつた。彼は後年外交官になつたが、この酒が患つて夭折した。外務省では、山座圓次郎などより加藤の方が豪かつたと、今でも噂してゐるほどであつたが……。

このクラスには山口の上山滿之進や、一高の英法クラスでは首席だつた田原豊や、二高の首席田所美治、三高の首席幣原喜重郎などいづれも虎視眈々として首席を睨つてゐる。田所は後に文部次官、田原は三菱製紙の筆頭重役だが、當時はいづれも秀才型の學生。上山は後に臺灣總督などをやつて相當頑強なところがある人であるから、生やさしい秀才ではなく、殊に新校の山口を代表してゐるので負けまいといふ意識で肩を怒らしてゐたさうだ。

——かくて、明治二十八年の七月が來た。法學士となつて彼等が社會をトビ出す日であ



る。三ヶ年の螢雪の功、漸く酬わられて、卒業成績の發表せられる日だ。

首席は誰だ！ 卒業する當人達も、彌次馬も、ファンも、父兄先輩も、その日は本郷にワイ／＼押しかけたといふことである。

小野塚か濱口か？ 清野か田原か田所か？ 見よ、意外な番狂はせもあるではないか！ 政治科三十名——首席は小野塚喜平次、次席が中島滋太郎、三席が濱口雄幸で、あとは下岡忠治、矢作榮藏、高野岩三郎の順だ。伊澤多喜男はビリから二番目。

それにしても、中島滋太郎の次席はどうしたことだ！ 中島は甲州から十五歳の時に上京し、自炊生活をして苦學した青年だ。今は日本郵船の重役もやめ閑地について東京の郊外中野で俳諧生活をやつてゐるが、溫和の中に不撓の強靱性をもつ人だ。人知れぬその黙たる勉強が、彼に次席を與へたのであらう。此のダーク・ホースの出現には何人も意外だつたらしい。今日、新聞や雑誌に、首席小野塚、次席濱口と二人をならべて、その間に中島のゐたことを除いてゐるが、ホントは小野塚、中島、濱口の席順である。

英法では四十一名中、清野を抜いて、土方久徴が首席であつた。彼の次が清野、河村金

五郎の順、田原は五席、田所は六席、加藤本四郎は十席、上山滿之進は十三席、幣原喜重郎は十五席、俵孫一は二十三席、ビリの四十一席がマラソン王日比野寛。

獨法の二十一人では久保田政周が首席、佛法五人のうちでは、ビリに此の間逝去した前東京市長の西久保弘道がゐた。

財部か？ 竹下か？ 小栗か？

ロンドンの軍縮會議を終へて歸朝し、萬人注視の中に立つ海軍大臣だつた財部彪大將も、兵學校生徒時代は、首席争覇のチャンピオンとして、衆目環視の人物であつた。何となれば、同期生即ち兵學校第十二號クラスの中には、竹下勇大將あり、元の海軍大臣岡田啓介大將あり、小栗孝三郎大將あり、その他、中野直枝、布目滿造、向井彌一の諸中將をはじめ、英俊逸才、雲の如く輩出して、我海軍現役巨星の半ばは、このクラスだけで占めてゐる偉觀である。此の中で、同輩を抜きん出て、海軍の財部か、財部の海軍か、とまで言はれるには、群がる人材と角逐して、そのトップを切るだけの異常の努力がひそんでゐなけ



ればならない。果然、彼もまたこゝに逸すべからざるヒーローである。  
では、まづ、その頃の兵學校から述べよう。

その頃の兵學校は東京築地にあつた。元の水交社のあつた場所である。第一號クラスには日高壯之丞、山本權兵衛、片岡七郎、上村彦之丞等の蠻勇少壯將校を輩出して、その痛快な言動は、およそ海國日本のアドミラルたらんと志す青少年の、若い心を刺戟してやまぬものがあつた。

然し、入學試験は競争激烈を極めた。第十二號クラスの受験したのは明治十八年の秋、試験科目は英語と漢文と數學、六十名募集といふのに受験者總數三百七十三名、六人に一人といふ率だ。

さて、合格者六十名のうち、第一席を占めたのは小栗孝三郎だつた。彼は母堂が稀にみる賢婦人で、その兒女教育費を作る爲に、郷里石川縣からワザ／＼上京して、櫻田本郷町に有信館といふ旅館兼下宿を營んだのであつた。その旅館には海軍將校が大勢下宿してゐ

た。そして威勢のいゝ金モール服や、無限の空想をよび起す遠洋航海の話などが、この孝三郎少年の心をシツカリと捉へてしまつた。刻苦精勵の甲斐あつて、しかもイの一番で難關をパスしたんだから、その發表の日の有信館は、海軍將校達の祝ひ酒で大賑ひだつたといふことだ。

財部彪は何番？ これはこれまで祕密にされてゐることであるが、彼はこの年受験してゐないのだ。其前年度の入學生で病氣の故を以て一年間休學してゐた。だから、連中より一年先輩だつたといへばいへるであらうが、それが、何も彼の名譽を毀損するわけのものでもない。

面白いのはピリに近く五十七席を占めてゐたのが竹下勇であつた。

さて、明治十八年十二月一日、晴やかな海軍兵學校の入學式である。第十二號クラスとして新らしい制服で整列した未來のアドミラル六十名！

これから彼らの學校生活といふ希望と夢に抱擁された新らしい人生が展開されてゆく。



學校といつても、今日のカレッジ・ライフのそれではない。明治十年前後のまだ兵學寮といつてゐた頃は、武骨後々の諸國の豪傑が來り投じた時代とて、學業もソツチのけ、亂暴、怠惰、飲酒おかまひなしの生活であつた。それが十五年「軍人に賜はる勅語」の出づるに及んで、士氣は一時に振肅された。殊に海軍は、從來の放奔な氣風を一擲して、驚くべき綱紀肅正時代に入つてゐた。

第十二號クラスの六十名も、その嚴肅な生活で鍛へ上げられるのである。舍内の勉強室たる温習所に入るにしても、一同整列して監督士官の號令で入るのだ。食事も合圖のラツパで直に集合、もし遲刻すれば罰點の上に一時間位食堂の入口で不動起立をさせられる。だからラツパの音を聴くと、便所の中にも中止してトビ出して來なければならぬ。麥めしのかきこみが終ると、士官が『立てッ』それでもまだパクついてゐると、『ノロノロ飯を食つてゐて、それで戦争が出来るかッ!』と嘯鳴られる。

萬事が、かういふ方式で訓練されるのである。極端な劃一主義教育だといへばいへるがこの規則正しい日課をつゞけて、人に抜きん出た成績を取らうとするには、餘程明敏な頭

腦の持主で、短時間に要領をのみこみ、そして罰點を食はないやうに規律を嚴格に守りとほせる人物でなければならぬ。

誰が一番になるだらうか？ それは何よりも興味ある問題であつた。

一番で入つた小栗孝三郎のよく出来るのはいふまでもない。しかし、級中に特に目立つてクリアな頭腦と、煥發たる智才の閃めきを見せてゐたのは小杉辰三であつた。また竹下勇も意外な底力ある英才であることを發揮し始めた。中野直枝もまた學才では竹下に劣らない。

しかし、彼等の間にあつて、ひそかに畏れられてゐた一人がゐた。即ち財部彪である。財部は、どこといつて人間的な特徴のある男ではない。快活で、接するものが皆明るい氣分になれる性質であるが、その頭腦の確かりしてゐることは、誰が見ても一頭地を抜いてゐると思はれた。舊島津領の日向の都城から出て來ただけに氣骨もある。敏捷であつても輕薄ではない。どこからみても一點の難のない人物として、同輩達の深く畏敬するところ



となつてゐた。

小杉か財部か。

この二人のうち、どちらかゞ首席を獲得するであらうとは、専らの評判であつた。二人もその噂を聞かぬではない。猛烈な競争意識が手傳つて、スベ抜けた頭腦の冴えを、いよいよ發揮して雁行する。

財部には郷里に兩親がある。そして彼は非常な親孝行者だ。兩親から便りが届くと、常に彼の顔は一段と輝きを増す。父母をよろこばす爲めに！ 然り、彼は首席を狙はざるを得ない。キット、獲得してみせる！ 薩摩軍人の血の流れる彼だ。鼓舞された意氣に、スゴイヤうな緊張の日が続く……。

窮屈な一年も、無我夢中で過ぎた。待ちに待つた成績発表の日が来た！ しかも、今回の成績順で、六十名のクラスが六分隊に編成され、最も成績の良いものから順に、分隊の嚮導、伍長、伍長補が任命されるといふ話ではないか。功名心に燃え立つ若人が、伍長補

にも任命されないでゐては、何の面目があらう。ひとしく息づまるやうな緊張で、告示された成績表を見つめたものであつた。

一番は財部だ！

財部を首席に小杉、中野、小栗、竹下、山中(柴吉)の席順で、この六人が嚮導に任命されてゐた。嚮導は各分隊の隊長格である。細い紐のやうな金筋を制服の袖口に三本つけて大得意でゐられるのだ。

岡田啓介、福田久穂、森越太郎、向井彌一、眞田鶴松などが伍長で金筋二本をつけることになつた。

かうした成績順による階級的な制度は、あたかも卒業後の立身出世をすら暗示するものやうだ。勢ひ良い成績をとるために、彼らを驅つて死物狂ひに勉強せしめねばやまない。殊に小杉辰三は、關東の出身ではあるが幼時より神童を以て鳴つた男だ。財部の堅壘を抜くものは自分より他にない。もう一息だといふので、猛烈にピッチを上げて迫つて来る。



財部對小杉の爭覇戰こそ、兵學校初まつて以來の壯觀であつた。しかし、第二學年の成績も、依然、財部に首席の榮冠を與へてしまつた。次席の小杉の後は竹下勇が激しい躍進ぶりで追つて來てゐる。

この年、兵學校は築地から、瀬戸内海の江田島に移されることになつた。そして、機關學校の生徒二十名が、此のクラスに合併されて來て、六十名が八十名の大クラスに膨脹した。生徒も殖えたが、學科目も倍加した。そのために年限延長といふことになつて、九月も卒業の時期が繰延べされたのであつた。

サア、卒業の年度だ。この急激に増加した人數と學科目と年月の間を、巧みに切り抜けて恩賜の短劍を頂く者は果して何人ぞ？ 財部か小杉か、それとも他の彗星的人物か？ ダーク・ホースとしての竹下の進出も花々しいではないか？ 同僚後進はもちろん先輩の將校達も、毎日のやうに激勵の手紙を江田島に送つて、彼らの士氣を刺戟した。

當時、江田島の陸上には、校舎が無かつた。海岸に繋留された東京丸といふボロ船が校舎の全部だつた。かくて不自由ながらも、絶大の希望をたゞへた彼らの新天地にも、巢立

する卒業の日が遂に來た——。

明治二十二年、陽光燦として輝く四月、長くも時の聖上明治大帝は、江田島最初の卒業式に臨御あらせられた。

光榮ある卒業生——その首席はやはり財部であつた。彼と、小杉、そして竹下の順で、この三人は恩賜の短劍を陛下の御前におし頂いた。それから名譽ある御前講演者として第五席の岡田啓介がえらばれた。岡田はその頃の新興戰術たる水雷術に、最優秀の成績を示してゐた。講演の題は『水雷艇について』であつた。

式がすむと、八十名の新士官候補生には、憧がれの遠洋航海が待つてゐた。『比叡』『金剛』（もちろん初代のボロ軍艦）の二隻に便乗して、彼らは誇らかに海原に船出したのだつた。

終りに少し、後日譚を付け加へさしてほしい。首席の財部が、海軍の大御所山本權兵衛伯の愛婿となつた。後年、彼の迅速な出世ぶりを目して、岳父の七光りを説く者があるが財部大將の過去現在を通じて、何人にも先を譲らぬ努力と才能とがあつてこそ、今日の榮



達を得たのだとしなければならぬ。同じ山本伯の愛婿でも、山路一善中將の如きは、それほど迄に至らないではないか。

次席の小杉辰三は日露戦後の好況時代、少佐でやめて製鐵會社を起し、一時は大いに榮えたが、その後は凋落して、今は埼玉縣蕨驛で淋しい退隱生活を送つてゐる。その昔、財部との華やかな角逐時代を想起して『小杉は智恵負けしたのだよ』と同窓の某將軍が感慨深げに語つたことがあつた。

(B) 早大政經科三十八年組と商大二十一年組

永井か？ 大山か？

今の早稻田大學が、その前身の東京專門學校から、土地の名に因んで私立早稻田大學と改稱した頃、左様丁度今から二十九年の昔だ。官學閥に對抗して高く掲げた自由の旗幟に、全國の青年學徒の血は鳴つて、わが都の西北早稻田の森をさして來り投じたものであつた。今日は大講堂で大學部第一期生達の主催する辯論大會の日である。專門學校から大學となつた最初の大會であるので、總長大隈重信伯も、口をへの字に結んで正面に席をとつて耳を傾けてゐる。幾人かの辯士が交々立つてあらん限りの熱と意氣とで、調子高い青春の叫びをあげた。次に、重々しい步調で壇上の上つたのは、五尺六七寸もあらうか、雄偉な身體をもつた學生であつた。まだ少年らしい面影が、その顔つきのどこかに残つてゐて、双つの瞳は理想家肌の若人らしい至純さに輝いてゐるが、一面また、その悠揚として迫ら



ない態度は、心の準備の出来上つた有爲の材たることを思はせた。彼の名は永井柳太郎、  
經濟科の一年。演題は「東亞政策の將來」といふのであつた。

『滿堂の諸君！』と彼の第一語は壯重な響をもつて發せられた。

東亞に覇者たるべき日本は、日清の役で支那を打懲したが、今や北滿に侵入して虎視眈々  
と東洋の覇權を覬つてゐる露國の東漸を防がねばならぬ。それには日本がアジアの盟主と  
して自覺し、支那や韓國と友邦同和の精神で提携しなければならぬ。

——といふ、極めて書生論らしい大まかな論旨だつたが、理路は整然としてゐるし、そ  
の上態度は實に堂々としてゐて大きい。思ひなしか早稻田の偉人と仰ぐ大隈伯の聲色に髣  
髴たるところがある。

聽衆はスツカリ彼の雄辯に魅せられてしまつた。拍手の嵐の中に彼が壇を下りた時、總  
長大隈伯は側近者を顧みて言つた。

『わが早稻田にも、あのやうな雄辯家があるとは頼もしいことぢや……』

讀者諸君！ 此の大隈伯をして驚嘆せしめた青年學徒が、今の拓務大臣永井柳太郎氏で  
あることは、今更ことわるまでもないであらう。氏は、青年永井の時代から、雄辯家を以  
て早くも同輩中にぬきん出てゐたのであつた。後に、氏が早大を卒業する間に叫んだ、  
『保護政策とは何ぞ』の大熱辯は、大隈伯をして永井用ひるに足ると決心をなさしめたもの  
でさへあつた。

が、青年永井は、單なる雄辯家ではなかつた。大學の所謂辯論家なるものは、徒らに長  
廣舌を振つて、その實、頭腦が空疎で、かつ不勉強な連中が多い。學生にして、しかも既  
成政黨の院外團視せらるゝ理由が、そこにある。これに反して、彼は徹頭徹尾眞面目であ  
つた。前途に大きな夢を描くロマンチストではあつたが、一心になつて讀書三昧に入り得  
る勉強家でもあつた。忽ちにして級中第一の人氣者となつたが、また級中第一の秀才とし  
ても重んぜられた。

秀才といへば、も一人、永井と同じ政治經濟科に素晴らしい出來のいゝ學生がゐた。名  
を大山郁夫といつて、その風貌の上に、舉止の上に、極めてリファインされた上品さがあ



り、かつ鷹揚な青年であつた。彼は天才とも言つてよい程、英語が得意であつた。永井もミッシヨン・スクールの同志社の出身で、英語には自信があつたが、大山の水際立つた出来栄えには敵しがたかつた。まさに永井にとつては、勉強の上での好敵手といはなければならぬ。

だが、私交の上では、二人は極めて親密であつた。それといふのは、二人とも熱心なクリスチャンであつたから。これはズツと後の話であるが、大山、永井が卒業して、共に早大の講師となつた時、間もなく永井は大山その他に先んじて憧れの英國に留學した。何故そんなに早く洋行が出来たかといへば、ユニテリアン協會から永井に留學資金が出たからであつた。

大山にもこんな話がある。彼等が二年に進級して間もない頃、語學の試験が教師の都合で日曜に行はれることになつた。皆はずつ／＼不平を言つたものゝ、餘儀ない事情だつたので、仕方なく受験を承諾した。だが、意外、あれ位眞面目で秀才の大山だけが、どうしても受験を肯んじないのだつた。といふわけは「日曜日は、神の下し賜うた安息日です。

安息日には教會に行かねばならないのでたとへ落第しても試験は受けません」そして彼のみは試験を他處に教會で讚美歌をうたひ、午後は戸山ヶ原を悠々と散策してゐた。以て、いかに彼ら二人が熱心なクリスチャンであつたか判るであらう。

閑話休題、大山か、永井か、榮えある早大第一回の政治經濟科の首席で卒業するものは果して孰れぞ？ 今日、現内閣の拓務大臣として飛ぶ鳥落す既成政黨の領袖永井柳太郎氏と片や無産政黨の頭目として全國的人氣を獲得しつゝある大山郁夫氏とが、早くも今を距る三十年前、身を學窓において互ひに鎗を削つて鬪を争つたことは、まさに一奇とすべきことであらう。その壯觀思ひ見るべしだ。

永井の勉強法は、つねに要領よく大綱をのみこんでゐた。しかも講義の内容をそのまま鵜呑みにせず、自らの理想や經綸と結びつけて、理解し、かつそれらを巧みに綜合して自分の結論に導いてゆく餘裕をもつてゐた。その下宿で、澤山の學友達と快活に談笑する彼であつたが、また靜かに机に向つて洋書に讀み耽る彼でもある。この眞面目で、純眞で、



そして人に對しても親切な彼の人物は學友達の深く敬愛するところであつたのだ。  
 大山は何よりも明晰な頭腦で光つてゐた。すべてに理解が深く、かつすべてに頗る几帳面であつた。

彼が英語に達者であることは前述したが、後年シカゴ大學に留學した時、彼は入學の最初の日から難かしい講義のノートが自由にとれたといふ逸話によつて知られるであらう。で、この早大時代にあつても、毎學期催される英語會には常に出演して、見事な英語演説をやつてのけたものである。が、これだけになるには彼の一方ならぬ苦心を買はなければならぬ。彼が讀む書物がすべて横文字の原書であつたことは勿論であるが、友人が下宿に訪ねてくると、初めの挨拶からして英語でやる。下宿だけならばまだよい。一緒に散歩する時も、先方の出様に頓着なく話す言葉は皆英語であつた。彼は英語の會話の練習を、教會や教室だけでなく、その生活のすべてを通して徹底的に行ふとしてゐたのである。しかし會話の不得手な友人にとつては、これは大變迷惑なことで、散歩の途中には皆逃げ出してしまひ、一時は大山の下宿を訪ふ者も少なくなつたほどだつた。

こんな話さへ残つてゐる。一日、彼が友人を誘うて錢湯へ行つた時の事だ。彼は例によつて入浴中と雖も流暢な英語でペラ／＼やる。友人はあまり上手でない。時折は日本語をも交へながら合槌を打つてゆく。傍らで背中を流してゐた人達は、この二人の奇妙な會話をも珍らしさうに聞いてゐる。すると何といふことだ、一人が大山を眼で指して、『あれは支那の留學生ですか？』と友人に問うたのである。當時、隣邦からは有爲の青年留學生が多數早大に學んでゐた。彼らの會話は主として英語だ。英語の上手な大山が、彼らの一人に間違はれたんだ。流石の大山も苦笑せざるを得なかつた。

明治三十五六年といへば、日露大戰を控へた軍國主義、國家主義の極めて旺盛な時代である。が、その反面に、三十四年六月には安部磯雄、片山潜、幸徳傳次郎等の社會民主黨が結成されたり、同十二月には足尾鑛毒事件の直訴があつたり、社會主義的思潮が社會の底に急流してゐた頃でもある。將來の大政治家を胸に描く永井は率先して早大内に社會思想の研究會をつくつて、時代の流れを捉へようとしてゐた。大山はといへば、コチ／＼の



キリスト教萬能である。教會と學業の餘暇には、感傷的な詩をつくつて自ら慰めてゐた。理智的な反面に、燃ゆるやうな詩人的情熱を秘めた青年大山であつたから。

後年大山郁夫氏が極左勞農黨に投ずと聞いて、學友永井柳太郎氏は「大山君の性格は、昔から極端から極端に往くといふところがあつた。極端な基督教信者から、極端な無産闘士へ……正義心の人一倍強い同君としては無理もなからう」と評してゐたことがあつた。

とにかく、彼等の秀才振りには官學の徒がノートと辭書とに首ツ引きで一點一分を争つてゐるのとは少しく趣きを異にしてゐたのだ。志は天下にあり、理想の實現にある。永井の辯論と社會問題の研究、大山の詩と信仰、ともに餘裕ある秀才の型を見せてゐた。

——かくて明治三十八年が來た。いよいよ卒業である。ところが、最後のベストをつくすべき卒業試験に當つて、永井は風邪で臥床してしまつた。試験前のことではある。永井も下宿で頑張つてゐるんだらう位に思つて氣にもとめなかつたが、試験が始まつても彼は遂に出席しなかつた。

好敵手を病魔の手に奪はれて、大山も張合ひが抜けたことであらう。だが、他に永井に

代る者として無い。大山の獨壇場でゴールは閉ざされた。卒業生政治經濟科は九十四名、大山郁夫の名が首席に出て、永井柳太郎の名がビリ尻に連なつてゐる早大出身者名簿の秘密は、永井が追試験で卒業したことを除いて理解されない。

永井と大山——早大第一回生中に光るこの二人の名は、永久に全日本の名として残るであらう。

### 各務か？ 下野か？

つい此の間まで、東京商大に教鞭を執つてゐた下野直太郎博士といへば、「一橋の親父」といふ綽名で、マーキュリーの徽章をいたゞいた學生から親しまれてゐた名物教授であつた。明治の初年福澤諭吉翁が西洋から傳へた簿記學や會計學を、博士獨特の理論で大成した學界の權威なんである。が、専攻の學問が、こんな地味なものであるから、あまり世間には顔を出さないけれど、その人柄はナカナカ茶目氣のある、そして頭腦の鋭い御仁だ。先頃名譽教授として引退するまで四十幾年といふ講壇生活には、あの我國經濟學界の大御



所で横紙破りを以て鳴つた福田徳三博士なども、その學生時代に下野さんから叱られて、詫狀一札を入れ、ヤット退學處分を免がれたといふ珍談もある。またその自著『銀行簿記 計算法』は、左から縦書きにした尖端ぶりで譯名右書論の喧ましい頃は、時の鐵相小川平吉氏をして眼を白黒させた、その先生なのである。

下野さんは氏一流の人生觀をもつてゐて、それが講義の間にチョイ／＼挿入される。それがまた頗る辛辣で、昔から幾多の俊才の心膽を寒からしめたものだ。

——で、或る時、講壇に立つた博士は、滿堂の學生を見下ろしながら、こんなことを言つた。

『諸君、およそ、頭抜けた秀才は實業界では多く失敗する。だから仕方なく教授で燻つてゐる。金儲けといふものは、あまり頭によくない圖々しい奴でないと駄目なんだ』

これが、博士の現在の境遇を暗にほめかした逆説的眞理であることは、學生達には肯づけた。それは商大にあつては、東京高等商業學校の時代から、首席といふ秀才は、ほとんど母校に残つてプロフェッサーたるの階程を辿つたものであつたから。

だが、こゝで筆者が、一つ、横槍を入れないといふのは、皮肉にも、この眞理を裏切る一個の人物が、しかも、下野博士と同期の、東京高商明治二十一年組に出てゐるんだから。

それは、あの東京驛頭の巍然たる大建築『東京海上』の獨裁王として、長年保険界に雄飛し、今は日本郵船や、三菱信託の社長として、我が財界の大立物として時めく各務録吉その人である。彼は一橋未曾有の秀才兒であり、金儲けも人一倍うまい。

そこで、話は五十年の昔に溯つて、各務録吉勝つか、下野直太郎護るか、若き日の御兩人の首席獲得争覇戦を物語らねばならない。

面白いことは下野も各務も、共に岐阜縣の人である。たゞ各務は、父君が夙に官吏をやめて上京し、京橋に小さな茶舗を出してゐたので、少年の頃から東京で育つた。府立一中時代から非凡なる秀才として名高く、一橋に入學してからも級中では最年少者ではあつたが、ひとしく學友達の畏敬する人物であつたのだ。

數學と英語とが得意で、この點は下野の得意な學科と同じものであつたから、その競争



は白熱的で、互ひに質問を競ふ鋭い鋒先に、擔任の教師達がひどく惱まされたものであつた。

彼等より一級上には後に神戸高商の校長となつた水島鐵也や、現に三菱銀行の重役江口定條などの偉才があり、同輩にも相當得意とする秀才がゐたが、この科目にかけては彼ら二人の獨壇場で何人も齒が立たなかつた。

下野は地味にコツ／＼と驚くべき根氣で頑張つて行く。その精到な勉強法は、まことに首席を争ふ者としての堅實さがあつた。

各務は豪放で、若い癖に酒なども元氣よく飲む。客あらば天下を論じて時の移るのを忘れる風もある。無遠慮に足を机の上に投げ出してゴロリと四疊半に寝ころんでゐる時もある。が、諸君！ その反面にかくされた血のにじむやうな刻苦精勵を彼から見落してはならない！ 一度机に向つた彼は、その人並はづれた大きな鼻口と、蓬々たる鼻毛のあたりから、溢れる精力を吐き出す如くウン／＼唸りながら、一心不亂に勉強に全精神を集中するので。夜の一時が打たうが二時が鳴らうが會得し切るまではランプの下に嚙りつく彼で

ある。後年、彼が保險の研究の爲、會社から英國に駐在を命ぜられた時、晝間の仕事の疲れを休める暇もなく、また異郷にある若い身でロンドンの夜の華やかさに心惹かるゝこともなく、一刻を惜しんで勉強した佛を、學生時代の彼にも見出して頂きたい。

彼は瘦せぎすで、肩が怒つてゐた。誰かゞ綽名をつけて『衣紋竹』と呼んだが、今日に至るまでこの名が残つてゐる。彼を知る人は、彼の我儘で押し強い性格さへもが、この名で遺憾なく表現されてゐるといふ。しかし、彼のもつて生れた性格は、常に人生最悪の場合を豫想して、いかに困つても他人の厄介にはならぬ。自らベストを盡したことならば、敗れても後悔がない。それ故に、考へに考へた上で物事にブツつかるといふ態度である。一介の我武者羅流とは類を異にしてゐる。だから彼が學生時代から好きであつた碁にも、この態度が現れてゐたが、勉強の上での競争には、最もよくそれが見えてゐた。いかにして勝を得るか、と考へ抜いた揚句、水も洩らさぬ準備をする彼だ。下野と雁行しつゝ、二年を終へて、遂に三年の卒業の日が近づいて來た。一年は下野に譲り、二年では抜いた。一對一の接戦である。



明治二十一年七月、東京高等商業學校第十一回の卒業式が舉行された。卒業生二十一人中、各務鎌吉が首席で、次席は下野直太郎であつた。式後、茶話會の席上で、各務が「下野君のお蔭で、僕は思はぬ勉強をしたよ」といふと、下野は「各務君の努力には勝てなかつた」と言つて呵々大笑した。

下野はその自説の如く秀才は金儲けが出来ないといふので母校の研究室に残り、各務は京都の商業學校教諭となつて赴任した。彼一流の妻いところを發揮して、ピシ／＼と辛い採點をしたので、生徒から排斥運動を起されて辭職し、大阪の商品陳列所の書記に轉じ間もなく故矢野次郎翁に拾はれて東京海上保險に入社したのだ。但し、これは後日物語、詳しく述べる必要はない。

## (C) 帝大法科大正四年組

田中？ 唐澤？ 河合？ 土方？

それほど遠い過去ではない。明治から大正に移つて間もない頃だ。中世紀風な赤煉瓦の建物、緑なす大樹、すべてがアカデミックな學園の風景である。その風景の中に點景する角帽の群——いま、クローベの芝生の上に腰を下ろした彼等の一團がある。

こゝは世に謂ふ「赤門」——東京帝大の校庭だ。襟章のJといふ字は、法科大学の學生であることを示してゐる。

「末弘さんのやうに秀才だつたらなア……」

と一人が、さも羨望に堪へないやうな表情でつぶやいた。

「第一の末弘には、僕たちの仲間では誰がなるだらうか？」

「サア……、田中かも知れないぜ、末弘さんと同じく獨法だし——」



「しかし、經濟の町田も出来るさうぢやないか、政治科の河合だつて、唐澤だつて、猛烈に勉強してるからナ……」

「勉強家で、頭がよいんだからナ、とにかく銀時計組だよ」

銀時計——その言葉を聞くと、皆は、じつとしておられないやうな氣になるのであつた。男子の功名心といはうか、あの光榮ある卒業式のことを思へば——

だが、その異常な昂奮をよび起す卒業式の思ひ出は、また、その半面に深い、悲しみの極みでもあつた。それは、彼らにとつてはつい此の間、といつても詳しく書けば明治四十五年の七月十日、晴の大學卒業式に明治天皇が臨幸遊ばされたのだ。便殿は圖書館の二階に設らへられた。そこに上らるゝ陛下の御足どりが、いつになく定まらぬ御様子に拜された。

式は陛下の御前で、嚴かに開かれ最優等の秀才として、獨法の末弘嚴太郎が小軀を運んで恩賜の銀時計を拜受した。新聞は此の秀才のために、賑やかな報道で紙上を飾つてゐた。が、それから數日を出でずして、陛下御不例の急報が、全國民を驚愕せしめた。帝大臨

幸は十日、御床に就かせられたのが十四日である。かくて此の時の帝大卒業式が、悲しくも明治天皇最後の御臨幸となつたのだつた。

世は諒闇の悲しみにある。學園にも、世と共に嚴肅な氣分が滿ち流れてゐた。悲しき卒業式の印象は、學生達の氣風をグツと引き締めてゐた。そして一途に眞剣な勉強に熱中せしめてゐた。

芝生の上で語り合ふ學生は、まさしく法科大学に籍をおく秀才連であつた。一學年を終へて、二年目を迎へたばかり。彼等はやがて大正四年組として、世に期待される若人達である。

それは、今日、最も有望な、多數の「大學教授」を輩出した秀才組として名高いものである。試みに挙げれば「財政學の基礎概念」の研究に不滅の業績をとゞめ、また、マルクス陣營總攻撃に味方を引具して立ち向ひ、學界を二分してその一を帥ゐる慨のある東大教授土方成美博士は、町田成美と名乗つて、經濟學科の一學生であつた。また、東大教授として、思想界に、評論界に名のある河合榮治郎氏、同じく東大教授の商法の權威田中耕太



郎博士、外交史の神川彦松博士、米國憲法の高木八尺教授、前東大助教授江原萬里氏、東京商大教授の孫田秀春博士、九州帝大の大澤章教授、それから學界以外では内務大臣官房會計課長唐澤俊樹氏、總領事横山正幸氏、外務書記官で文藝評論家としても令名ある柳澤健氏、商工書記官の竹内可吉氏、三菱紐育支店の高橋鍊氏、山形縣内務部長川村貞四郎氏、横濱取引所理事永野護氏、朝鮮殖産銀行理事植野勳氏、無産黨の人格者河上丈太郎氏、日本製陶常務伊吹震氏、等々々、まことに多士濟々たるものである。

此の中で、第二の末弘嚴太郎として、學生の最大の希望たる首席の榮冠と名譽ある銀時計とを頂く候補者は、學生仲間の噂では獨法の田中耕太郎、大澤章、政治科の河合榮治郎、唐澤俊樹、經濟科の町田成美、田坂一郎、伊吹震等であつた。當時は法科大學の中に、英法、獨法、佛法、政治、經濟の五科に別れてゐた。歐洲大戰前であるから、ドイツ文化の勢力を代表する獨法に最も秀才が集まると稱せられ、その人數も一學年に二百五十名を數へ、五科中の最大のものであつた。次は政治科の百五十名、經濟、英法の五十名、佛法は外交官志望者のみに限られ微々として振はなかつた。

獨法の花形、田中耕太郎、原籍は佐賀縣であるが、中學は福岡の修猷館、現東京朝日新聞の編輯局長緒方竹虎氏と首席を争つて遂に克ち、一高に進んで更に獨法の首席を押し通した秀才である。クリスチャンで、潔癖家、規則正しい生活に生真面目過ぎるやうな學究肌を見せてゐた。然し氣性に鋭いところがあつて、何よりも負けず嫌ひ、一旦かうと決心したら、挺でも動かない、田中の頑張りは有名なもので通つてゐた。蒼白い神經質らしい顔に、不屈の氣概を現して、勉強するのであるから、彼の競争者大澤章や孫田秀春、それからこれは岡山の秀才として鳴らしてゐた高畑輝雄も容易にその堅壘を抜くことが出来ぬ。高畑はあまり猛烈に勉強したので、これは後日物語であるが、次席で獨法を卒業後間もなく病に臥して夭折してしまつたほどである。最近の疑獄事件で、名を賣つてゐる東京地方裁判所判事石郷岡岩男氏も、この同級二百五十人中の一人として勉強してゐたのだが、首席争覇線には、まだ間があつた。

政治の河合榮治郎は、また一高時代から鳴らした秀才であつた。



一高時代の河合は、しかし、東都學生界の花形としての方が、より有名であつた。鶴見祐輔、青木得三、森戸辰男と歴代雄辯家揃ひの一高辯論部を背負つて立つてゐたのが河合だつたのだ。その瞳は純情に輝き、その吐く聲は理想に燃えてゐた。

河合の友情論、それは、既に定評のあつたものだつた。彼は、友情の發露に學校生活の意義を説いた。友の愛ひにかなしめば、わがよろこびに起ちて舞ふ、若き日のよろこびもかなしみも、それはすべて友情の中に溶けこんでゐる。友情こそ人生の精華である。大學に來てからも、彼の友情論は、感激し易い學生界を風靡してゐた。

彼は、東京郊外千住の徳島屋、あの有名な「河合の花白酒」の本家の次男坊だ。令兄が家業を嗣ぎ、學問の好きな弟の彼が、一高、帝大と順調に進んで來たのだ。幼少の病弱も、鍛錬で克服し、堂々たる體軀から吐出す聲量の豊かさはその頑健を思はせるものがあつた。その身體で、演説の外は、眞一文字に勉強に立ち向ふ彼であつた。たゞ一つ、他の猛勉家に比して、彼が變つた點は、彼が常に「思想」を求めてゐたことであつた。それ故彼は、また非常な讀書家であつた。その當時は、學生も研究室の書庫に自由に入る事が許されて

ゐた。河合はその塵をあびつゝ書物の一冊々々を引出しては讀んだ。が、彼が驚いたことには、どの本を引出してみても、必ずそれに書入れがしてあつたり、要點のところは線が引いてあつたりして讀みこなしした跡のない本は皆無であつたことであつた。いかに當時の學生が、拮据勉強したか、これで窺知されるのである。

河合に對抗する秀才としては、二高から來た唐澤俊樹がゐた。由來、長野縣の秀才は一高よりも二高を経るのが多かつたが、唐澤もその一人だつた。小柄で、いかにも山家育ちらしい男だが、眼から鼻に抜ける俊敏さだ。口も達者、文も達者、精悍で剛發で、まことに油斷のならぬスパシコイ才人だ。趣味といへば、下宿の二階で碁をバチ／＼やつてゐるが、これが初段に近い腕前で、學生の中には、一寸彼に敵ふものがなかつた。學問の方でもぐん／＼力で抜く男だ。二高を首席でとび出した彼が、大學で首席の候補者たることに不思議はない。

河合と唐澤とはだからよい取組みだつた。河合はいかにも學生らしい鷹揚な構へ方で、一分の無駄もなくガツシリと進んでゆく。唐澤は滿身の才氣と氣魄とで、奇襲し猛撃する。



此の二人こそ、政治科百五十人中の首席如何の問題でなく、法科大學全體の成績で、一か二を争ふ壯觀であつたのだ。

他に篤學でガツチリした秀才の典型神川彦松や、病弱ではあるが頭腦が水の如く澄んだ江原萬里などが、首席候補として呼聲が高かつた。江原は、しかし、與謝野晶子女史等と交際して、明星派の歌人として、綽々たる餘裕を思はせるものがあつた。故神田乃武男の息高木八尺もよく出來た。

經濟では、斷然町田成美が光つてゐた。姫路中學未曾有の秀才で、京都の三高をも首席で出た男、無類のハニカミ屋で、あまりパツとしない存在であつたが、不斷の努力で蓄積された學力には、人をして驚かしめるものがあつた。とりわけ、彼が學友から畏敬されてゐた點は、常に定説に對して懷疑的であつたことだ。世間の通説や、大學者の權威で通つてゐる學説に對して、盲目的に服従せず、疑問の點があれば、敢然としてそれと議論を交へる點であつた。これは後土方成美として、東西の論敵と、花々しい筆陣を張つた闘志満

腹の彼の面目を、當時において見せてゐたものに違ひない。

とまれ、彼は、今の人が驚く程勉強した。何點何分と、細密に評價された點數が、卒業後の榮達から、花嫁の問題にまで影響するのであるから、この世智辛い點取主義を、端的に表徴してゐたものは、教室の席取戦であつた。何百人と入る大教室の、最前列中央の、少しでもノートをとるに、先生の講義がうまく聴きとれる座席の争奪戦なんである。とりわけ舊三十番教室は最も大きな教室で、獨法も政治科も經濟科もすべてが一緒になる教室である。この混亂は物凄じばかりである。朝の七時半になると、もう入口の扉の前に、丁度今でいへば神宮球場で席券を買ふ時のやうに、大勢の角帽がひし／＼と詰めかけてゐる、小使が内側から扉を開く、と、サツと身を引く、それから、一齊にドン／＼と駆けこむんだ。騒々しい靴音、ノートを席上に投げて優先權を占めんものとザワめきヒシめく、全くこれが、神聖な講堂で、崇高な學理を聴く學生かと怪しまれるばかり。喧嘩狼藉なんか珍らしくない。



或る者は繩梯子を窓にかけて、いちやく教室に入りこみ、よい席をとつたといふ際どい藝當を演じるものさへ出た。

當時、早大や慶應、明大等の他の大學生達によつて、高等文官試験豫備試験の撤廢運動が起された。まだ私立の大學は、名は「大學」だつたが、今日のやうに大學令に據つた學制や、内容を具備してゐない時代であつたから、私立の大學を出たものは、高等文官試験を受けるには、豫備試験を通過しなければならぬのだ。ひとり、帝大だけが、これを免除されてゐた。それを帝大並みに扱つて呉れといふ要求だつたのだ。

ところが、帝大生は舉つてこれに反對した。帝大生ほど眞剣に勉強してゐるものはない。帝大生に與へられた特權は、この勉強の賜である、それを容易く同列におくことは不公平だといふのだ。今日なら、別に、かうまで特權を主張するわけではなからうが、當時としてはその猛烈な勉強振りが、かういふ特權を是認させたものであつた。それほど、帝大生といへば、机に嚙りついてゐたものであつたのだ。

序でだが、此の問題に對して當時帝大の美濃部達吉博士が「撤廢問題の是非は兎も角とし、撤廢が國家のために有利であるならば、私は官學に居る身とはいへ、豫備試験撤廢に大賛成である」と述べたが、それは當時にあつては異常な進歩的言説として、河合榮治郎、高木八尺等の進歩的學生をひどく感激させたものであつた。以て、一般の思想的雰圍氣がこれで察せられると思ふ。

さて、その頃の學年試験は、蟬の聲聴く六月であつた。が、學生の試験勉強は、松飾りのある頃から始められ、遅いのは櫻の咲く時分、落第するのは不忍池に蓮がパチンと開く頃着手するものとされてゐた。それは從來の學生の座訓であつたのだ。だが、この河合、町田、田中、唐澤、大澤の連中は年改まる菊の花の薫る頃から既に戦備おさ／＼怠りないといふ評判であつた。物凄い白熱的勉強ではある。松、櫻、蓮の順の上に、菊をおいて、これを超弩級の勉強家と稱して、これに見習ふ學生が続出した。勉強、勉強、勉強！ 勉強だけが、學生の生活のすべてであつた。「大學」なるものは、彼等が憧憬の瞳には、意外



にも沙漠にひとしい無味乾燥なものとして映るのであった。特に點取競争の目的以外には、大した意義をもたぬ學問のやうに思はれた法科大学の講義のうちで、たゞ一つ、寛克彦博士の法理論だけが、當時はオアシスのやうな新鮮な感じを與へた。何故かなら、その後の寛博士のやうに古めかしい神道や、佛教を、講義の内容に取入れないで、西洋哲學の匂ひをもち『思想』の香り高い唯一の特色ある講義であつたから。それほどに、形骸化した冷たい論理の言葉ばかりを、詰込式に暗記してゆくのが學生の生活であつたのだ。

が、その時、數多の新進教授が、海の彼方から、新しい知識と思想とをもつて歸つて來た。憲法の上杉慎吉博士、獨法の松本蒸治博士、法制史の中田薫博士、政治學の松岡均平博士等の諸教授が、その所謂新人であつた。明治から大正への轉換期、それから歐洲大戰にかけて、大學にも活潑に動く新しい潮流が流れこんで來たのである。若い、そしてフレッシュな希望の火を待ち焦れてゐた學生達の、胸は一入ときめいた。新しい息吹のかかつた知識を！ 思想を！ 彼等は、一道の曙光を認めたよろこびに、貪るやうに學問に精進したのでつた。

自由主義！ それは、その頃の最も新しい思想であつた。そして、彼ら學生の急進分子は、この自由主義思想の洗禮を受けた人々であつた。今日の河合教授や、土方博士、神川博士、高木教授、田中博士らが、一口に言つて自由主義的傾向の強いのは、また宜なる哉である。

——かくて、彼等に、四ヶ年の課程は匆忙として勉強のうちに過ぎ去つた。政治科における河合と唐澤とのめざましい白熱的争覇、獨法科における田中と高畑、大澤との併進、經濟の町田の獨壇場、皆それ／＼に後世への語り草を残して、いよいよ大正四年の七月、卒業の日は來た。

首席は誰？ 銀時計の拜受者は誰？

全法科大学を通じて、田中耕太郎、唐澤俊樹、河合榮治郎、町田成美の四人が恩賜の銀時計を押しつた。首席者は、獨法で田中耕太郎、經濟で町田成美、政治科では唐澤俊樹が河合を押へて榮冠を獲得した。英法では高橋鍊、佛法では横山正幸がそれ／＼首席



であつた。

首席！ 首席！ それは彼等の青春の血を以て購ひ得たものであつた。恩賜の銀時計はそれに酬らるゝ最大の光榮であつた。そして、更に、彼等には、またよろこばしい幸運が手をひろげて待つてゐた。町田成美には時の帝大教授で現貴族院議員土方寧博士が、養子に懇望して、町田成美は土方成美になつた。土方博士は英法學の權威であつたが、採點は苛酷に失する位、それで英法科を志望するものが甚だ少なかつたといふ爺さんである。この人の眼にかなつた秀才成美君は、興信所の下調べに「性質溫順」と書いてあつたのなどは、後年の土方博士の活躍ふりと思ひ合して面白い挿話だ。

河合榮治郎にはやはり帝大教授の金井延博士が、その愛嬢國子さんを、これに嫁せしめた。唐澤俊樹には、九州の石炭王貝島家から養子に希望して來た。彼は、一旦これに應じたが、後、故あつて離婚、官界に入つて後、前東京商業會議所副會頭杉原榮三郎の女婿となつた。官界入りが後れたので、まだ課長級でとゞまつてゐるのだといふ噂である。

(D) 帝大四十二年組と陸軍第十二期生

堀切か？ 青木か？ 下條か？

赤門二十八年組といへば、前にも述べたやうに濱口雄幸、幣原喜重郎、俵孫一をはじめ、大臣級の人物を政界、實業界、學界等に輩出せしめた有名な出世クラスであるが、此の以後にこれに似たクラスを求めるとなると、四十二年組を引出して來なければならぬ。もちろん、ズット年も若くなるが、社會の各方面の第一線の人物として、次の天下を窺ふ花形揃ひとしては、何といつても此のクラスである。まあ、その顔觸れを見給へ。

四十六歳の若さで帝都の市長にをさまつた現内閣書記官長堀切善次郎氏を筆頭に、前大藏省主税局長青木得三、賞勳局總裁下條康麿、前臺灣民政長官河原田稼吉、前警視總監丸山鶴吉、カナダ大使徳川家正、労働總同盟會長鈴木文治、ペルシヤ公使笠間梶雄、貴族院議員次田大三郎、八幡製鐵所理事立石信郎、大藏省主計局長藤井眞信、朝日新聞顧問前田



多門、代議士八並武治、同戸澤民十郎、平賀周、近藤達紀、有田八郎、大塚惟精、松村義一、横山助成、日本青年會理事田澤義鋪、行政裁判所評定官澤田竹治郎、伊太利大使館一等書記官岡本武三、等々々、づらりと並んでゐるところは天下の壯觀だ。その他、知事として令名のある、またはあつた人々に現警視總監の藤沼庄平を始め、岡正雄、藤岡兵一、鈴木信太郎の諸氏、數へ立てれば數限りがない。

しかし、こゝで一言斷わつておくことは、此の人達の學生時代に、今日の榮達が豫想されてゐたといふのでは決してないことだ。『學士様なら娘をやるか』で、大學卒業生に對する社會の信用は相當にあつたけれども、何しろ日露戰後の大不景氣時代で、實業界の不振は大學卒業生から就職口の大半を奪ひ去つてゐた。三十九年には足尾の鑛毒事件で暴動が起き、四十二年八月には幸徳秋水の大逆事件だ。以て當時の社會狀勢が想像されるであらう。

そこで、大學卒業生の驥足をのばすべき分野は、僅かに官廳方面に限られてゐた。高文をパスし、成績優秀なものだつたら、大手を振つて官界の人たり得る、が、それだけであらう。

る。それ以外には出世の途は見當らない。かういふ事情に直面して、わが四十二年組の秀才達も、どうして安閑と下宿に寝ころんで暮されよう。首席の榮冠を！ 恩賜の銀時計を！ しかも、彼らの一級上には、それ、前古未曾有の學校秀才として、天下の耳目をあつめてゐる鳩山秀夫對穗積重遠の爭覇戰が展開されてゐるではないか！ 彼らたるもの、相競うて首席爭覇線上に躍り出なければならぬ——。

彼らの中で、首席候補者として注目されてゐたのは、獨法科の堀切善次郎、藤井眞信、立石信郎、前田多門、英法科の松村義一、澤田竹治郎、平賀周、政治科の下條康廣、青木得三、次田大三郎、河原田稼吉、丸山鶴吉の諸氏である。

英法の松村は長州人であるが、一本調子で鐵のやうな男、痛快な、千萬人といへども我往かんの氣慨があつて、その明快な頭腦の切れ味よりも、意氣旺な直情徑行的な男らしさにおいて、斷然光つてゐた。が、澤田のねばり強い、そして冷靜な、秀才肌と對比してその成績の上でも、容易に優劣が判じられなかつた。堀切は豪放とか磊落とかいふ點はない



が理智的な頭腦で、キビ／＼とした牙えを見せてゐて、いかにも素晴らしい頭のよい學生だ。何人の眼にも映つてゐたものだ。早稲田中學から一高と學んだ頃には、柔道に熱心で二段の免状さへ取つてゐたが、大學に來てからは毎日圖書館に閉ぢ籠つたまゝ出て來ない。鷹揚にかまへてゐて迫らず、しかも最善の努力をつくして勉強三昧にあるのであるから、どの成績もとび離れてよい。他の立石も、藤井も流石にその壘を摩すに至らない。君子然として老成の風がある前田多門も、勉強は人一倍するが堀切の頭腦と努力には追隨出來ないと諦めてゐた。

そこへゆくと政治科は賑やかだ。眉目清秀の貴公子然たる美男子で、東京府中一中一高と首席を争つて來た下條康廣がゐる。また一高時代から東都の雄辯家として鳴らしてゐた青木得三がゐる。頭だけが財産だといはれて來た次田七五三郎（後に大三郎と改名）がゐる。手腕家で勉強家の河原田稼吉がゐる。形勢逆踏し難いではないか。

下條は美男子でもなか／＼覇氣があつて、暴れ者の一人である。その輪廓の正しい顔と

祖父の醫者兼歌人の下條言忠がつけてくれた康廣といふ名で、一寸聞いた者からは、公卿の莫迦息子のやうに思はれたが、彼を知るものからは、銀時計を拜受するものは彼だらうとひそかに折紙つけられてゐた。が彼は決してノートに嘯りついてゐる蒼白秀才ではなかつた。盛にマルクスやエンゲルスの本を讀んで、歐米の社會問題や經濟問題の紹介を試みてゐた。といつて、今の社會科學研究生のやうな態度ではない。どこまでも冷靜な改良主義漸進主義の立場である。これはしかし、當時の大學生としては珍らしいことで、彼の篤學と、その國際的な見識を語る一面であらう。青木は、雄辯家であつても政治家肌でなく堅實な事務家の風があつた。着實といふ言葉は彼のためにつくられたかの觀があつて寸暇を惜んで勉強するといふ態度だ。秋田の田舎にゐた頃から神童として鳴つただけに、一高では下條や堀切と第一線に立つてゐた秀才だ。政治科で恩賜の銀時計は、下條か、青木かと注目されてゐたのも無理はない。

面白いのは丸山と鈴木とであつた。丸山は何でも出来る才物である。頭もよく、要領を



急速かつ適確に呑みこんで、後は熱で押しつけてゆく調子、後年彼が出世して朝鮮警務局長となると「こゝは朝鮮北端の、二百里餘りの鴨綠江……」と國境警備の唄を歌つて全國に宣傳した人物だ。文章などもなかなかうまい。それに、クラス會で酒でも出ると、眞先に酔つて踊り出すのが彼だつた。『坊主抱いて寝りや可愛ゆてならぬ、どこが尻やら頭やら、今の坊主は生臭坊主、肉も喰へば、酒ものむ、女みだぶつ法蓮華經』これが彼の十八番の歌だつた。それでゐて、級中五番と下がつたことがないのであるから、あの丸山がと、人が不思議がる秀才の一人だつた。鈴木文治は、三十八年に廢校された山口高校出身の秀才で、赤門においても囑望されてゐたのだが、實家の破産から非常な苦境に陥り同郷人で、宮城縣の古川中學時代の先輩吉野作造氏の世話になつたり、海老名正氏の書生になつたりして、苦學をつゞけてゐた。そのやうな事情で、勉強一方に没頭出来なかつたらしい。鈴木といへば、熱心なクリスチャンであることも涙もろい新體詩を書くことと、袴の破れを紙よりでつくるつてゐることでも有名だつた。

さて、斯様な状態で、一年二年と過ぎて、いよいよ、卒業の四年目が來た。獨法では堀切が毎年トップを切つて、銀時計候補たることを確實に示してゐたが、問題の政治科では下條と青木とが、他の群雄に肉迫されつゝ、雁行して進んでゐた。三年までは、二對一で下條が勝つてゐたが、最後の決戦で、銀時計の光榮は、どちらが拜受するかわからない。下條か、青木か、これが頗るデリケートな問題であつたのだ。四年になつて、これらの秀才達はいづれも高文の試験にパスしたが、堀切と下條との成績が、圖抜けて良かつたことなどが、一層話を面白いものにしてゐた。

が、すべては、やはり、力の差だつたのかも知れない。それが、全力を傾注しての闘ひであつた以上は。

明治四十二年の七月、遂に最後の決勝線に到達したんだ。首席は果して誰々であつたらうか。英法の首席は澤田竹治郎で、松村義一は次席だつた。獨法では、豫期の如く堀切善次郎、立石、藤井がこれにつゞき、前田は五席、有田は十六席だつた。問題の政治科では、青木が首席だつた！ 下條が次席、次田が三席、河原田が四席、丸山は七席だ。鈴



木文治は一四六名中の六十七席。

さて、銀時計は、堀切と青木とに賜つた。學窓の最高榮譽を得て、彼らの感慨は、いかにばかりであつたらう！

が、學窓の外には、不景氣を就職難が待つてゐた。成績拔群の人々は、袖を連ねて官界の人となり得たが、鈴木文治の如き、辛うじて秀英舎印刷所の重役秘書になり得たのだつた。朝日新聞の記者になつたのは、それから間も無かつたが――。

二宮か？ 杉山か？

「現陸軍を見渡して、まづ、兄弟揃つて大將にまで漕ぎつけるのは、畑の兄弟だらう」

これは誰しも陸軍通の口にするところだ。畑兄弟とは、畑英太郎、俊六の二秀才である。英太郎中將が關東軍司令官から、宇垣陸相の後任として呼聲高かつたがその英才を惜しまれつゝ、任地旅順で長逝した。その死の直前に、大將に昇つたからマアよいとして、さて、弟の俊六中將はどうか？ 今は第十四師團長で大將には間があるが、さういへば畑中將の

同期、陸軍第十二期クラスは逸才雲の如く、いづれも指折りの大將候補ばかりではないか。即ち最近陸軍航空本部長になつた杉山元中將をはじめ、第五師團長二宮治重中將、教育總監部本部長香椎浩平中將、滿洲軍參謀長小磯國昭中將、陸軍次官柳川平助中將、第十六師團長浦穆中將、憲兵司令官秦眞次中將、その他中將で待命になつた毛内靖胤、郷田兼安、深見新之助、日下部道德等、また、現役の旅團長や、師團司令部附の少將を求めると、大抵は此の十二期出身である。

まさに、次の陸軍はこのクラスで背負ふであらうことは、その同窓が陸軍部内の樞要の地位を壟斷してゐる形勢を見てもわかるであらう。

ところで、この秀才揃ひのクラスは明治三十三年の陸軍士官學校出身であるが、このうちの何人が首席の榮冠を見事に獲ち得た人物なのであらうか？

——話は、彼等の士官學校時代に溯る。日清戦役後の戦捷に酔うたは東の間、滿洲の一



角から眈々として東洋の篡奪を企圖してゐる露國のあることを思へば、國軍の士氣も彌が上に緊張して来る、國民の軍隊に對する信頼も、また異常なものがある。若人の大部分も劍を以て起たうと志す有様、だから自然に士官學校に秀才が集つて来る。後年旭川に在任中『こもりゐる我が家淋しみ雪除けて、外の面に窓の灯をとゞかしむ』と詠んだ齋藤瀏少將も、當時は信州の松本で、漢詩人齋藤星軒に養はれた秀才だつたが、その天稟の詩才を擲つて、幼年學校から士官學校へと進んで來たほどだつた。

彼の同級生で、見渡したところ、これは將來あると思はれる傑物は、二宮治重、毛内靖胤、畑俊六、小磯國昭、蒲穆、秦眞次、杉山元などであつた。

二宮は、その氣魄といひ、牙え切つた頭腦といひ、手腕といひ、百パーセントの秀才だつた。戰術家としても非凡なはたらしきを見せるであらう。市ヶ谷の士官學校時代は餘り成績は振はなかつたが、大學へ入つてからは斷然他を壓してゐた。

毛内は、名が變つてゐるので、すぐにその存在を認められたが、その人柄も一種の風骨があつて、奇傑毛内の名は、常に級友の話題の中に入つて來た。粗暴ではないが、多少の

蠻氣があり、しかも俊敏で、容易に他の追隨を許さない慨がある。

畑も毛内と並んで、底力のある秀才だつた。百姓のやうな顔をしてゐるが、その智慧のありさうな眼の動きは、たゞ者ではない。その兄貴の英太郎が、また鳴らした秀才だつたので大學で二宮を追ひ越す奴は、彼ではないかと畏れられてゐた。畏れられてゐるといへば、小磯は級中の中心人物だつた。彼の豪氣、彼の銳氣、それは軍人としては、まさに本格的の性格ではあるが、どこかに人間の練れた、器局の大きいところがあつた。實戰において發揮されるであらう彼の統率力を素晴らしいと思はれた。彼が、もう少し蠻氣を多分にもつてゐたならば、それは海軍の先輩山本權兵衛を聯想されるのだつた。そして、杓子定規の勉強はしないが、どんな問題でもその急所を明察して、苦もなくこれを自家薬籠中のものとする不思議な頭腦は、天才の俤があると謳はれたものだ。

蒲は、文治派の頭目だつた。語學がズバ抜けて出來た。どこかにハイカラな、文事を解する一面があつた。軍人熱に浮かされて志願したやうに、他の者には思はれた。むしろ高等學校から大學へと、政治家か外交官にでもなるべき肌合の才子だつた。秦もよく出來た。



寛容で、腹も出来てゐるが、やはり文治派の方で武骨稜々たる連中の間では、どこか蒲に似て洗練されたところがあつた。

文治派といへば、杉山もそのやうな型だつた。容貌は婦女子のやうで、言葉づかひも柔かく、少しも外に剛氣の現はれるといふやうなことがない。おとなしくて圭角がなく、一口にいへば凡くらぢやないかとまで言はれる人柄だ。が、圓滿に發達した常識と、萬事を處理する手際の良さは、何處となく衆に秀れた人物らしい趣きを具へてゐる。

——ところで、一年から二年になる時だ、誰が首席になるだらう？と思つてゐると、意外！杉山がちやんと一番になつてゐるではないか。二宮が次席だ。呆れたのが級友である。一齊に注目し始めた東才杉山！かくて彼は二宮と首席を決する立役者として登場した。

その頃の士官學校は、猛烈な詰込主義だつた。どし／＼新らしい泰西の科學的戰術が入つて来る。すべてに一新されようとしてゐた轉換期だ。いくら詰込んで追つつかないと

考へられてゐたからだ。で、生徒は、激しい教練の暇をぬすんでは、學科の勉強をする。すべてが規則づくめだから、消燈時間が来ると勉強が出来ない。或る者は深夜戸棚にかくれて、こつそり蠟燭を點けて讀書する。或る者は寢臺の下にひそんで、上から毛布を蔽つて火光の洩れるのを防いでゐる。制服靴穿きのまゝ假睡して、眼が覺めると直ちに書を手にする。甚だしいのは便所に立て籠つて、線香の火で字を拾つてゆく。中には假病を使つて、練兵を休み、病院の明るい燈の下で、靜かに勉強しようといふ横着なものも出て来る。これらの點取勉強の仲間から離れて、どつしりと構へてゐたのが小磯であり、規則で與へられた時間だけ書物に對してゐて、しかも驚くべき理解力を示してゐたのが杉山であり二宮だつた。だが、二宮の態度には、一度は杉山に譲つたとはいへ、再び壘を摩させないといふ白熱力が見えてゐた。

大學に於ける二宮對杉山の、涙ぐましい程眞剣なそして堂々たる競争態度に、他の連中も、便所などでノートに嚙りついてゐる態度に、内心忸怩たるものがあつたのか、もうそんな莫迦氣な眞似をしてまで點を取らうとする風習が、漸次薄らいで來た。が、卒業の成



績點が、立身出世に影響するのであるから、ヘビーをかけざるを得ない。眞劍だ！  
 そのうちに、三年になる時に、二宮は杉山を抜いた。一對一である。これが卒業の時にはどうなるだらうと、手に汗を握らしたが、流石に二宮である。遂に彼は、第十二期生の首席を獲得した。杉山はこれに次いだが、二人の成績は遙かに他を抜け出てゐた。毛内が三席、小磯が十七席であつた。

(E) 東大四十一年組と慶應二十二年組

鳩山か？ 穂積か？

鳩山・穂積といへば、秀才の代名詞である。二人揃つて、赤門を開闢以來の優秀成績で出た典型的の模範學生だ。今は帝大教授の職を退いて、丸ビルで辯護士を開業してゐる鳩山秀夫博士であり、一方は親族法の權威として母校東大の教授で、最近までは法學部長だつた男爵穂積重遠博士であるが、二十年前の、丁度入學の明治三十七年から卒業の四十一年までの四年間、此の兩秀才の學生時代は、世間を擧げてどちらが首席で卒業するであらうかと、その一舉手一投足に注意した時代であつた。

それは、秀夫博士の父君が明治政界の一方の將であつた鳩山和夫博士であり、令兄一郎氏が當時少壯政治家として父君の志をつぐ名士であり、否、それにも増して、我國の代表的賢母春子刀自が薰陶する自慢の息子さんであつたからであらう。重遠博士の方も、父君



は學者として、また樞密顧問官として令名高き穂積陳重博士であり、叔父君には國法學者として有名な穂積八束博士があつた。

春子未亡人の令息と陳重男爵の御曹子——しかもこの二人は幼稚園から高師の附屬小學附屬中學、一高、赤門法科と、これまでの學歴が同じ徑路を辿つて、かつ舷々相摩す競争相手として並進して來てゐるのである。これが、どうして世間の評判に上らずにゐられやう。新聞は盛に書き立てるし、家庭では毎日鼓舞激勵するし、天性とびきり上等の頭腦に恵まれてゐる二人ではあるが、安閑として遊んでゐることは出來ない。他に目ぼしい競争相手はないが、鳩山には穂積、穂積には鳩山と、これは夢寐にも忘れられない好敵手であつた。

彼等二人のチャンピオンの、これまでの戦跡は、まことに龍攘虎搏のそれである。小學は鳩山はA組、穂積はB組の首席であり、中學では鳩山に首席を譲つて穂積は次席、一高では獨法科に入つた穂積と、英法科に入つた鳩山とは、各々その科の首席を奪つて、さて、

大學では珍らしや兩雄、共に獨法科に籍をおいたのである。これが世人の視聽を惹かないとはどうしていへよう。

當時、赤門は天下の秀才の集ふところである。殊に獨法科は、ドイツ流の概念法學が最高調に達せんとしてゐた頃とて群英雲の如くこゝに蟬集した。しかもこゝでの成績如何は社會に出てからの立身出世を、最後まで支配するかのやうな權威をもつてゐた。石に嚙りついても優秀な成績をとらねばならない。いづれも一點一分を争つて學業に専心してゐるのである。普通の秀才ならば、首席を二人で、争ふどころか、とつくに他の者に奪はれてゐなければならぬ。

當時、その成績の出來不出來は、松、櫻、蓮の三つで判るといはれてゐた。正月の松飾りの立つところから試験の準備を始める者は上の部、櫻の花がチラホラ笑ひ出した頃に手をつける者は中の部、不忍池の蓮の花がバチン！と靜かな朝霧を破つて開く頃に、机に向つたのは下の部で、これはどうかすると日暮れて道遠く落第しないとも限らない。——そして、此の松と櫻と蓮の、そのいづれともあてはまらなかつたのが、實に、鳩山秀夫、穂



積重遠の二學生であつた。

大 學 評 判 記

鳩山は快活な社交家で、人間もさばけてゐた。明るくて豪放なところがある。だから試験期が來ても隅田川のボートレースには出かけてゆくし、中學時代からファンである撞球のキューも握る彼である。この撞球は、家庭に父君の代から立派な玉臺が備へてあつて、彼の明晰な數理的頭腦に適合してゐると見え、多藝多才な彼の、多くの餘技の中で最も好むところのものでつた。後年ドイツに留學した時、彼は日本のアマチュア撞球家として、大いに鳴らしたものである。その他、時としては令兄一郎氏のお相手に碁盤を圍む日もあつた。まことに餘裕綽々だ。

その代り、彼の勉強法は、小學時代の習慣で、毎日豫習と復習だけはチャンとしてある。副ノートをつくつて、要領を書き抜いたり、参考書の抜粋も抜目なく整つてゐる。天才的な頭腦に加ふるに、此の要領だ。少しも慌てるには及ばないではないか。

穂積の方も、流石に未曾有の秀才である。蒼い顔に銀杏鉢巻で、机にへべりつくなどの

秀 才 鈍 才 物 語

醜態は決して見られない。英國紳士型とでもいふべき重厚な態度で、着實に、周到に、平素から準備してゐる。鳩山は學科第一主義で、書物といへば學科に關係のあるもので、それ以外の時間は陽気にスポーツや室内競技に費してゐた。だからそれだけ英雄閑日月式の派手やかさが見える。これに反して穂積は、餘分の時間を、科外の讀書に費した。思想書や哲學書や趣味的な書物を父君の書庫から探し求めては讀んでゐる。地味ではあるが、貴公子らしく、かつ、それが將來の專攻學問に視野の廣さと融通性とを與へる結果になる。

これは鳩山の穂積に及ばないところ。

鳩山は天才的な秀才で、野生的な坊ちゃんである。穂積は篤實な學究で、どこまでも貴族的な若旦那様である。それが、彼等二人の日常にも勉強振りにも躍如として、自ら異つた光彩を投げてゐた。

試験の日は、兩秀才共定刻五分前にキチンと出席した。書き終へると、鐘が鳴る二十分位前に、鳩山はサッサと出てゆく。穂積は五分位前に悠々として退場する。時計と睨めつ



としてウン／＼唸つてゐる他の學生達は、これでスツカリ悲觀してしまふ。  
鳩山の答案は、いかなる難問題でも何の苦もなく驚くべき簡潔さにおいて要領よく纏めてあつた。その論理的な頭腦の冴えに、教授達は舌を捲いて感嘆したものだ。穂積の答案は頗る注意深く行届き、懇切を極めたものであつた。鳩山を百點とすれば、趣きこそ違へ穂積も亦百點を與へねばならなかつた。

さて、大學四年間、その四分の三を、鳩山は穂積とスレ／＼に、しかし穂積を凌いで首席を續けて來た。目前には卒業の日が迫つてゐる。ラスト・ヘビーだ。鳩山か、穂積か、新聞は又しても書き立てる。中には豫想記事を發表してファンをあふり立てるものもある。かうなると首席獲得も一つのスポーツである。

明治四十一年七月、目出度い卒業式は來た。鳩山、穂積の順である。鳩山は九十六點七分、穂積は九十五點五分、東大始まつて以來の、そして恐らく絶後でもあらうところの、見事な成績であつた。三番太田嘉太郎、その他六席には前警視總監貴族院議員長岡隆一郎などが列んでゐた。

磯村か？ 藤原か？

古い話ではあるが、今日の時勢と大層似通つた時代でもあつた。明治二十年といへば、二十二年の憲法發布の年を間近に控へて、物情騒然、自由黨の闘士は全國に烽起し、血氣に迅る青年等は、口に政治を談議する時代であつた。その十二月二十六日に、例の保安條例が出た。星亨以下五百七十名、侃々諤々の政客に、帝都外三里の地に放逐を命じた亂暴極まる法令である。

——丁度その日の深更、麻布永坂町の下宿の二階では、慶應義塾の學生生田定之が、薄暗いランプの下で讀書に餘念がなかつたが、突如、踏み込んで來た官憲のために危険人物として拘引された。彼は現昭和銀行頭取の生田氏當時は年齒僅かに十八歳の少年である。何が故に帝都外に放逐される必要があらう？

急を聞いて駆けつけた學友達は、おし迫つた歳の暮を、八方に手分けして、善後策に狂奔した。級友の神戸寅次郎（後に慶大教授）、田中萃一郎（後に慶大教授）久原房之助、藤



原銀次郎（現王子製紙社長）、高山長幸（前代議士）、高橋光威（前代議士）等は、當時校庭の北端にあつたところから「北海道」と名づけられてゐた義塾の寄宿舍に立て籠り、或る者は拳を揮つて暴慢なる官僚打破すべしと叫び、或る者は卓を叩いて民権伸ぶべしと悲憤した。

こゝに一人、豊前中津の出身で、當時少壯政論家として聞えてゐた津田與二氏の玄關番をしてゐる苦學生がゐた。巨大な體軀と、豪放な氣象とは、一向苦學生らしい面影もなく、大抵の困難は踏みにじつて通るといふ線の太いところがあつた。名は磯村豊太郎、不羈卓落の豪傑として、義塾の名物男であつたのだ。

彼が寄宿舍にやつて來た。そして太い拳をつき出して演説を始めた。

「諸君、團結は力だ。一人々々が騒いでゐても何ら効果はない。生田君の救済運動も、須らく吾人は團結の力によつて警察當局に交渉を進めようではないか！ 更に、吾人は、學校當局に對しても、この團結の力を以て、現状改革の要求をしたいと思ふ。現に、わが義塾當局の吾々塾生に臨む態度は、どうであるか？……」

喧々囂々たる場内が、急に水を打つたやうに静まつた。官憲横暴の、政治家氣取りの彈劾演説から、問題は急轉して、もつと具體的な、自分達の學校生活の改革といふことに、つき入つて來たんだから、驚くと同時に、眞剣になつたのだ。皆の瞳は、異様に輝いて來た。そして燃ゆるやうな氣魄で叫び續ける磯村の、一言一句を聞き洩らすまいと耳を傾けてゐる。

讀者諸君よ、或ひは不思議に思はれるかも知れない。あのお上品で、温厚で、現代學生界流行の尖端を往くやうな慶應に、どうして此のやうな荒削りの霸氣の時代があつたのであらうかと。

が、それは少しも怪しむに足りない。福澤諭吉先生が三田山上に獨立自尊、實學第一の旗を翻へした頃は、上野の山で維新變亂の鐵砲の音が聞え、塾生は本を擲つて國事に奔走するといふ有様、その後、天下は明治政府によつて統制されてからも、塾出身の矢野文雄、犬養毅、尾崎行雄、箕浦勝人等の諸氏の如く、志は天下にあつて自由民権に活躍するとい



ふのが塾生の理想であつたのだ。校風がおのづから蠻的で、大きな波動でのたうつてゐたことを豫め御承知願ひ度い。

で、この明治二十年の頃も、塾先輩の井上角五郎氏が、金玉均と結んで韓國で大芝居を打つてゐるといふ物騒な時代である。學生の氣風の荒かつたことも、豫め御承知おき願ひたい。

そこで、かの生田定之はどうなつたであらう？ 彼は級友達の努力も効果なく、裁判所に送局され、林有造、片岡健吉等同郷の名士と共に退京を命じられたのであつた。理由は彼が演説を好み高談放論することゝ、一つは『自由』の發祥地土佐の出身であるといふために。

次に磯村によつて烽火を擧げられた義塾學制改革の方は、どうなつたであらう？ そも磯村は、何をどう改革しようといふのであらうか？

當時の義塾は、大體において今の七年制高等學校のやうなもので、大人科、童子科と稱

してゐたのが豫備科と改稱され、その上に本科があつて英學を主とした高等教育を授けるのであつた。その他に別科と稱して速成科があり、當時は兩方で約六百名の學生が、福澤翁の高風を慕つてこゝに學んでゐた。但し、卒業しても官學の如き徴兵免役の特典すらなく、明治十七年には福澤塾主の名で、この特典に預るやうにと願書が差出されたが却下されたほどであつた。その上、時勢は藩閥官僚の全盛で、その專横の爲に自由な政論も極度に壓迫され、塾出身者も漸次志を官界や政界に失つて、これからは實業界に赴かうとする機運に邂逅してゐた。そこで、塾當局は、大藏主税官だつた小泉信吉氏（今の小泉信三教授の父君）を塾長に据ゑ、教頭に當時日本一の英語學者と評判の高かつた門野幾之進氏（現時事新報社取締役會長）を聘して、教務や學制の改新を斷行した。つまり近代的なカレッジをつくり出さうと意圖したのだつた。が、それが少し思ひ切り過ぎて、急に塾生の細かい行動までを取締り始めた。その上、採點法を設けて嚴重な試験制度を施行した。これまでは、試験の及落などは、單に教師の見込み、又は合議の上で進級させてゐたのが、今後は一點一分を嚴密にして、その點數で席次、及落を決定することになつたのである。



これが、多くの塾生の反感を募らせたのだつた。採點法の如きは、寧ろ政府の役人養成學校のすること、獨立自由を尊ぶ三田塾の精神とは、氷炭相容れないものだといふ彼らの主張であつた。

ところが、こゝに注意すべきことがある。彼等塾生が、採點法に反對することは、決して勉學を怠ける口實にやつてゐることではなかつた。彼等の多くは各地方から選拔された秀才兒であり、鬱勃たる青雲の志に燃えてゐる青年學徒であるから、いづれも人一倍勉強する。第一に、學校當局彈劾の發頭人たる磯村豊太郎その人が、無類の勉強家で、かつ成績拔群の塾生であつたのだから、少々意外である。彼が反對する新採點法による成績を見ても、彼は嶄然として級中に首席を占めてゐるではないか！

彼は福澤諭吉、中上川彦次郎、朝吹英二等、明治實業界の先驅者を生んだ豊前中津の産で西南役の時は、十歳の身に大刀を持つて、夜警團の中に加つてゐたといふ剛の者である。塾では、後に富士紡績の社長として實業界に雄飛した先輩の和田豊治や、現在第一火災の

社長で同級生の柳莊太郎と共に大食會を組織し、笹蕎麥を身體の高さに積み上げたり、天井三つに大福二十個をペロリとやつたり、物凄いな牛飲馬食黨であつた。が、その反面、滿々たる覇氣に上氣せず、地道に刻苦精勵して叩き上げてゆかうとする確かさをもつてゐた。それが彼をして一介の粗大漢に終らしめない理由であつた。

級中、彼に匹敵對抗する秀才としては、何人もがまづ藤原銀次郎に指を屈した。藤原は信州長野在平柴の農家に生れ、十六歳の時上京して獨逸協會學校に學んだ。だから、英語の外にドイツ語が得意で、洋書といへば英語の本しか讀めなかつた級友達の羨むところだつた。彼には磯村の豪放性はない代り、堅實一方で、安逸を好まず、苦闘の中に人生を見出す人物であつた。

ところで、こゝに書くまでもなく、磯村は現在北海道炭鑛の社長で貴族院議員たる人、藤原は王子製紙の社長として、我國製紙事業界の霸王たる人物、この今を時めく實業界の兩巨星が、その學生時代には二秀才として並び稱せられ、その青春を賭して首席を争つたことは、何としても面白い機縁であり、思うても血の湧く壯觀であつた。



磯村の明徹果斷、藤原の堅忍不拔、これこそまさに龍虎の玉を争ふ活畫である。磯村はその明敏な頭腦と才能とで、大概の課目は人並すぐれた成績でやつてのけるといふ風であり、藤原は用意周到、コック／＼と不撓の忍耐力で噛みこなしてゆく態度である。磯村は創意に満ち、藤原には守成があつた。磯村は覇氣で突破し、藤原は自信で貫く、磯村の淡泊さと藤原の正直。もし、完全に二人が一致してゐる點は、その猛烈な勉強と、老いて後の今日まで續いてゐる讀書癖と、それから下手の横好きの將棋とであつたであらう。他に二人とも珍らしく道樂はなく、磯村が手八丁口八丁でクラスの間をとり廻り、藤原が口角泡をとばして議論してゐる外は、二人とも机に嚙りついて讀書研究に全精神を集中するのが常であつた。

彼等が本科の最上級生になつた時、即ち二十一年の春、磯村が口火をつけた塾長排斥、學制改革の要望は、全塾生の輿論となつて、勢の赴くところ、團結の力で學校當局に對抗するところに来てしまつた。指導者磯村は、他の柳莊太郎、野口寅次郎などの豪傑連

と共に、花形役者として運動の先頭に立つてゐた。藤原も勿論趣旨において磯村等に賛成であつたが、指導者に磯村が立つてゐる以上、冷靜な態度で自分はそれについてゆけばよいと思つてゐた。

運動は當局と妥協出來ない點にまで切迫した。同盟休校だ！ 寄宿舎にゐた三百名を中心に通學生を加へた六百名は、本部を廣尾の福澤先生別邸『狸蕎麥』において、全校的ストライキに移つた。慶應義塾創立以來の大騒動である。

このストライキは、殆ど二ヶ月に及んだ。その間、演說會や集會は頻々として開かれ、尠なからず人心を刺戟したので、集會條令の喧ましかつた頃とて警察の警戒も嚴重を極めた。遂に福澤先生の調停となつて、一段落がついたが、しかし、責任は塾生側にある。そこで磯村はその責任者として他の數名と共に退學處分に附せられてしまつた。

——が、この人物を失ふことは、塾にとつては大きな損失である。それに、藤原にとつても、よき競争相手を失ふ精神上の打撃は大きい。藤原等を主とする磯村復校運動が直ちに計畫され、旬日の後、福澤先生の肝入りもあつて、磯村等は再び塾の人となることが出



来た。

サアこれからは、一途に卒業への最後のコースだ！ 大きな衝撃で感激の最高調にあつた塾生一同は、今までに倍する熱心でもつて、勉強に専心した。否、それにも増して磯村、藤原の猛勉強振りはどうだ！

磯村は果して首席を継続するか？ 藤原は磯村を最後のゴールにおいて抜くか、それは塾全體の興味ある観物であつた。

かくして、明治二十二年の卒業の日が来た。同盟休校のことも加減したのであらう、磯村は二番におちて、藤原が首席であつた。三番は緒方都一郎、この人は肺を病んで間もなく夭折した。磯村か、藤原か、この競争は、單に學校生活だけではなかつた。實社會に出てからも、この二人は有爲な傑物としてその前途を矚目された。彼らがいかにして、これに應へたかは、何よりも現在の地位が雄辯に物語つてゐるであらう。

## (二) 首席とビリの豪傑

### 現内閣のビリ尻組

兩種は一致する！ なんてことは、ニュートンだつたか、アインシュタインだつたか、何でもエライ學者の言つた眞理だから、間違ひはない。だから、學校の秀才でも、ビリ尻の鈍才でも、結局は同じことだ、——といへば不勉強の口實のやうに聞えるけれど、拔群の秀才と徹底した怠け者とは、どちらも一種の天才で、われ／＼凡庸の徒の及ぶところに非ず、である。

——早い話が、現内閣の大臣諸公の顔觸を見ても、學生時代の首席とビリ尻とが仲よく肩をならべて居並んでゐるところは天下の壯觀といはなければならん。總理大臣の齋藤實子爵がまだ富五郎と呼ばれた少年時代、郷里の水澤で縣廳の給仕をしてゐたが、大志をいだいて上京、最初は陸軍の幼年學校を受験したが、會津の柴五郎（現陸軍大將）など、一



緒に見事落第し、翌年海軍の兵學校を受験したがこれも駄目、ところが運よく補缺入學を許されて、全クラスの最末席に列なる光榮を有したものだ。未來の海軍大將總理大臣も、一度はビリ尻の味を嘗めてゐるのである。

また現内閣最年少の大臣として世に謳はれてゐる農林大臣後藤文雄氏なども、熊本の高時代は野球部主將の印綬をおびたばかりに、學業成績はビリ尻だつた。それでも「俺は秀才に非ず、豪才なり」とスマしてゐたが、大學に進むや在學中に高文をパスし、しかも全國第一位の榮冠を獲得して、俄然後藤文雄の名は机の蟲共を驚倒させたものだ。

それから、拓務大臣の永井柳太郎氏が、やはりビリ尻組の一人だ。明治三十八年の早大政治經濟科卒業成績の一番お終ひのところ、永井柳太郎の名前が出てゐるのだから仕方がない。もつともこの成績は、別項にも書いたが、永井氏が卒業試験の直前に風邪にかゝつて、試験の多くをフイにしたといふことが最大原因だつたが、それにしても此のクラスのトップが、かつての勞農黨の輝ける委員長だつた大山都夫氏で、ビリ尻が後の大臣たる永井氏であつたことは、面白いコントラストではないか。その頃の大山氏は、早大始まつ

て以來の秀才といふので全校の畏敬を一身にあびてゐた。また永井氏はその雄大な抱負と満堂を酔はせる雄辯とに、早大切つての名物男であつたのだ。それにしても、此の二人を大切な卒業試験に當つてクラスのトップとビリ尻とに引離した運命のいたづらは、何と考へても面白い。

### 赤門の首席とビリ尻

天下に名だたる赤門——東京帝大に雲と群がる秀才の中には、随分と一風變つた者もあつた。向ふ鉢巻で辭書と首つ引きで勉強し、天晴れ恩賜の銀時計を頂いて立身出世の首途を祝福されようといふ連中もをれば、弊衣破帽の蠻カラ黨で學業成績などは眼中になくビリ尻でも將來天下に爲す有らんとする氣概に燃えるエラ物もゐた。古いところでは明治二十一年の赤門法科の首席が平沼騏一郎男でビリが小松謙次郎氏だ。平沼男は最近の政變では平沼内閣の首班として評判になつた人物。學生の頃から謹嚴な君子型で、二十一歳で大學を卒業した秀才だ。小松氏は大正十三年の清浦内閣に鐵道大臣で、現に貴族院一方の將、



ビリで大學を出ても大臣位にはなるのである。明治二十四年の首席は現政友會總裁の鈴木喜三郎親分でビリが現奈良電鐵社長、帝國鐵道協會長の井出繁三郎氏、學生時代から腕の喜三郎の異名をつた鈴木氏の方は先輩の平沼氏と同年齡で、鈴木氏の方が一ヶ月だけ弟分だ。どちらも首席で大學を出て、司法畑に入り、一緒に法學博士にもなり、今では政變毎に後繼内閣の首班として天下を争はなければならなくなつたとは皮肉な話である。

明治二十八年になると政治科の首席が現東大總長の小野塚喜平次博士でビリが伊澤多喜男氏、英法科の首席が現日銀總裁の土方久徴氏でビリがマラソン王日比野寛氏、獨法科の首席が久保田政周でビリが西久保弘道氏。この二十八年のクラスは人材輩出の年で、政治科の首席は死んだライオン首相の濱口雄幸と小野塚氏とが争つたものだ。そして大學三年までは濱口がトップを切つてゐたが、卒業の間際に土佐の養父が危篤で濱口が歸國した爲に第三位に落ち、小野塚が首席の榮冠を得たのだつた。伊澤は三高時代から精悍氣鋭、頭腦の冴えて濱口や下岡忠治などの級友を畏れしめたものだが、大學に来てからは餘り勉強しなかつた。そのためにビリ尻といふことになつたが、伊澤の存在は無視されることなく、

そのトロッキーに似た犇猛な面魂は依然クラスの中心人物の一人であつた。今では政界の一偉材を以て目せられ、齋藤内閣出現の黒幕として伊澤の凄腕が働いてゐたとは飽く迄も和製トロッキーの面目躍如たりだ。

獨法首席の久保田政周は、政治家として大成の途中で長逝したが、ビリの豪傑西久保弘道も、東京市長をやめると、直ぐ二十八貫の巨軀を横たへて病のために歿してしまつた。學生時代の西久保は劍道の名人でその豪快な太刀先に刃向ふ者は一人もゐなかつた。かつ斗酒なほ辭せずの酒豪でもあり、片々たる學校秀才の如きは彼の眼中になかつたのであらう。七高時代に戀愛事件で退校され、また一年生から入り直して、大學を出るまでに數度落第し、皆より七ヶ年遅れて法學士になつた男である。小才の利く人間の多い中に、悠々として迫らず、太い線で押し切るところは確かに一異彩だつた。

これらの二十八年出の人々は、二八會を組織して毎月一回會合して舊交を温めてゐる。マラソン王の日比野寛氏も愛知一中の校長時代から名古屋から一泊がけで上京し、昔の首席だつた土方日銀總裁などを相手に、マラソンの優勝秘訣を説明してよろこんでゐる。な



るほど人生は長距離競走だとすれば、ビリ尻でスタートした日比野さんは追々と他を追ひ抜きつゝ、最後の決勝線ではトップを切るつもりかも知れない。

### 親はビリ子は首席

明治四十五年の赤門法科からは、末弘殿太郎博士が、異数の好成績で燦然とトップを切つてゐる。ところが博士の殿父の末弘殿石翁が、明治十七年の赤門法科のビリ尻であつたことは一奇とすべきだ。殿石翁は大審院部長判事として、幸徳秋水の大逆事件を裁いて令名噴々たる人であつたから、ビリといつても決して鈍才でない。かつて親子揃つて法學博士に推薦されたが、親は子に譲つて、當時洋行中の殿太郎氏が博士になつたエピソードもある。

大正四年の東大政治科では首席が現和歌山縣知事の唐澤俊樹氏で、ビリが文壇の新居格氏だ。唐澤氏が土方成美、河合榮治郎、山口義一、河上丈太郎等の錚々たる秀才連と首席争覇戦に夢中になつてゐるのと反對に、新居格氏の方は既に愛妻を得て二兒の父となり、

學生らしくもない大島紘に博多帯といふ恰好で、近所のお師匠さんのところへ長唄を習ひに行つてゐたといふ有様、生來のノンキ坊である上に、これではビリでも卒業出來たのはまだよい方だつたといふことだ。しかし、卒業後の新居氏は翻然從來の封建日本的な生活を一掃し、大学院に籍をおいて早くも社會問題を研究し始めたのには、官界方面に走つた秀才連中いづれも一驚したさうだ。

新居氏より二年遅れて、東大佛法科をビリで出たのが麻生久氏、このクラスの首席が近藤常尙氏で、現に朝鮮總督府の官房秘書課長である。大學の三年間を時代の憂鬱に悩み、ノートを一擲して孤獨の中に人生を思索し、社會問題を考究してゐた麻生氏が、今や無産陣營一方の頭目として世に聞え、専心ノートに嘯じりついて首席となり、高文をバスした近藤氏が今日僅かに一課長の椅子を朝鮮に占めてゐるのと比較する時、そこに、時代の大きな移り變りが感じられる。

### 早稻田の異風景



成績順を餘り重視しない三田の慶應義塾では、首席やビリ尻は問題にされない。しかし、早稲田大學では相當に面白い結果をみせてゐる。殊に、秀才が集まつた頃の文科において然り。

明治三十九年の早大文科は、關與三郎、杉森孝次郎、片上伸の順で首席を争ひ、ビリに控へてゐたのは水谷八重子の兄水谷竹紫君だつた。文壇の批評家として後世名を成した片上伸や哲人としての名聲噴々たる杉森氏を凌いで首席を占めた關氏は、學生時代から大變な酒好きで、下宿はいつでも酒氣紛々、一升徳利が六疊の部屋のアチコチにころがつてゐるといふ有様、それでゐて頭腦明晰なことは、流石の秀才杉森、片上を以てしても敵はなかつた程であつた。卒業後早大教授として哲學を擔當してゐるが、長年の豪酒が祟つたのか、今以てこれぞといふ業績のないのが残念である。ビリ尻の水谷氏は本名武で竹と紫をもちつて竹紫と號した。早稲田時代から文士を以て任じ小説を耽讀して學業に超然たる風があつた。どうせ學業成績が悪いのならビリ尻で出てやると豪語してゐたが、運よく目的を果し得た一人だ。このやうな不心得な希望は小説家直木三十五氏もかつて早大在學中に

抱懐したことがあつたが、直木氏のは一切の試験を受けず、卒業の時だけ記念寫眞の眞中に入つて大威張りで撮影したが、遅かりしその時には授業料未納で放校處分を受けてゐたので、遺憾ながらビリ尻は他人に横取りされたさうだ。

明治四十一年の早大文科首席は北吟吉氏、ビリ尻が安成貞雄氏である。北氏の頭腦を以てすれば、またその多藝多才の手腕を以てすれば、首席は易々たるものであつたらう。しかしビリの安成氏は一種の奇傑であつて、彼には首席の北氏も頭が上らなかつた。安成氏は、後に高等幫間と自ら嘲ると共に文壇を嘲り、社會を痛罵しつゝ、その數奇なる半生を終へた痛快兒で、いかにも學校秀才に對して、ビリ尻の權威を發揮したやうな人物であつた。

明治四十四年には、吉田絃二郎氏が首席で加能作次郎氏が次席、ビリには後の舞臺協會員佐々木百千萬億氏が控へてゐた。變り物の佐々木氏は何かやるだらうと級友から期待されてゐたが、その後世に埋もれてしまつたのは惜しい。



（三）學界の人氣男末弘博士の横顔

赤門の名物教授

過ぐる年、水上選手権大會が芝プールで行はれた時、審判長の椅子につゝ立つた五尺にも足らぬかと思はれる小男が、身丈に餘る大きなメガホンを振り廻し、見物を制したり、競技をテキパキ進めたり、その鮮やかな指揮振に、彼は何者だらうと、満場の見物はただ袖引き私語いて、怪み且つ讚嘆するのであつた。

また、オリンピック水泳豫選の大會が大阪で開かれた日、その同じ小さな姿は會場の入口にも現はれた。が、間もなく彼と受付係との間には何か争ひが起つたらしく、受付係の大きなわめき聲が聞えた。「……イヤ駄目です。君がいくら末弘殿太郎だなんて言つたつて、誰も信じやしません。氏名詐稱までして入らなくてもよからうぢやないか！」この聲に委員の人々が内からドヤ／＼と出て來たが、ハツと驚いて、鄭重に敬禮したかと思ふと「ヤ

ア先生、よろこそ」と迎へ入れた。彼は従容として場内に入り、やがて大會審判長の椅子に腰を下ろした。

知らぬ者には怪まれこそすれ、彼こそは東京帝國大學教授（現法學部長）法學博士末弘殿太郎氏その人であつたのだ。毎朝の始業間近な時刻になると、帝國大學の正門から銀杏の並樹路へ流れこむ學生の群にまじつて、きつと潑刺たる活氣に満ちた末弘博士の姿が見うけられる。黒のソフト帽、裾短かな外套、左の腕には大きな赤革の鞆を抱へて、稍々蒼味を帯びてはゐるが、引締つた神経と、鋭い眼光とに、冴え切つた頭腦の良さを見せながら、小刻みな急ぎ足でやつて來る。數分の後博士が法學部の大講堂にあらはれると、忽ち急激の如き拍手が學生達の間から起つて、白熱した雰圍氣は、何かしら軽い興奮を覺えしめる。——その昔「おでん、かん酒、いなりずし」で通つた赤門の名物も、今では全學の人氣を一身で背負つた五尺一寸の末弘博士によつて代表される時とはなつた。

末弘博士はあの和氣清麿を祀つた大分の宇佐の生れである。殿父は幸徳秋水の大逆事件を裁いて一代の名判官と謳はれた大審院判事末弘殿石翁だ。一高、帝大と、所謂秀才の辿



る常道を踏んで、明治四十五年七月恩賜の銀時計を拜受して獨法科の首席で卒業した。それから故菊池大麓男の愛顧を得て、美濃部達吉、鳩山秀夫の兩博士とは縁戚となり助教、博士、教授と、トン／＼拍子の出世振である。

だが、然し、博士が今日の地位を築くまでの徑路を顧みるならば、そこには博士、天稟の天才が閃めいてはゐるが、決して徒らに幸福にのみ恵まれた安易なる道程ではなかつた。時勢を察知する明敏と、正しきを愛する純情とは言はずもがな、異常なる刻苦勉勵と、不屈、不撓、徹底的にやり抜くまでは、一步も退かぬ意氣の潜むことを見逃がしてはならぬ。以下少しくその風貌の一端を物語つてみよう。

### 父子揃つて博士推薦の候補

學生時代に於ける博士の秀才なることは普く知られてゐた。だから博士が大學を卒業すると同時に、恩師の一人である春木一郎博士などは、篤學の根氣のよい末弘法學士を見こんで、ローマ法をやつてはと勧めたが、末弘氏は専攻に民法を選び、民法中特に債權を研

究した。卒業の翌年「鑛業權の本質」を論じて一躍學界に認められた末弘氏は、現行民法に於て資本の保護は行届いてゐるが、これと對立する大多數人の生活資料たる勞働に關する規定が著しく不備なのを見て、進んでこの方面の研究に入り、勞働法制、小作問題等の研究に先づ先鞭をつけた。東大の民法といへば、當時仁井田益太郎博士を筆頭に、三淵信三、鳩山秀夫、穂積重遠等の諸博士が、鞭を列べて進む壯觀を呈してゐたが、鳩山、穂積の二俊秀に比肩すべき將來を有する者としては、早くも少壯花形末弘を措いて他に無しと稱せられてゐた。

末弘博士が洋行中——それは大正九年のことだつた——學位令が改正となり、博士會で博士を拵へるのも愈々お名残りとなつた時である。各博士會はその最後の博士推薦會議に於て、随分如何はしい人物まで日頃の義理や情實で推薦したものであつた。工學博士が八十幾名づつ二度も出來て、學位記の用紙が不足したといふ珍談もあつた程である。が、稀少價値を重んずる法學博士會にあつてはみだりに博士を製造するのを嫌つた。それでも、推薦豫選の中には、大審院判事末弘嚴石氏と、令息の帝大助教嚴太郎氏との二人の名前



は記されてあつた。親子同時に博士になるか、息子が落ちるか、世間ではいろ／＼と興味深く噂し合つたが、大學内部では息子の方が當選確實だと言はれてゐた。そして開票の結果はやはり豫測通り、洋行中の嚴太郎氏に榮冠が下り、嚴父はお氣の毒にも洩れた。だが父子揃つて博士推薦の議に上るなどは、何といつても家門の譽であると、世間では又しても拍手を送つたのであつた。それにしても、末弘氏が校門を出でて僅かに八年、それで法學博士となつたことは、その蘊蓄の程を物語るものではあるまいか。

### 法律改造の新人

海外に在つて三年、大戦より平和へ、動搖比なき歐洲に學んだ末弘博士は、つぶさに法律の社會化の必要なることを痛感した。殊に法律一天張りの涸渴した官吏の頭を改造し、虐げられたる民衆を保護する法律の確立に努力すべきことを決心して、再び母國日本の土をふんだ。理論よりも實際、現實に法律を生かす傾向は、歸朝した博士には一層著しく見受けられた。我國の法學は、既に透徹した法典註釋學者として鳩山博士を有し、穩健なる

立法批評者としては穂積博士を有してゐたが、今や末弘博士を迎へて、氣鋭なる改革者を見出したのであつた。

會つて小石川植物園に東大法科の學生懇親會があつた席上、學生達に強要されて、壇に起つた博士は、開口一番「日本民法の文理解釋は兄鳩山によつてその完成を見たと言する。即ち民法學は今や行くべきところまで行きついてゐるのである。然しながら、學徒としてはその境界を超えて、新たなる境地の開拓に志す勇猛心がなければならぬ。或ひは不幸にして脚下の溝に顛落して世の嘲笑を買ふかも知れない。然しさうするところに學徒の眞骨頂があると信する」と叫んでその燃ゆるやうな意氣と、改造家としての氣概とを示した。爾來、新聞や雑誌に於て、民法改正の根本問題を論じ、借地借家法案を批評して倦むところを知らない。それらの論文を読む者には、博士がいかにか新しき時代の先驅者たるかがわからう。博士の眼は常に法律の運用に注がれ、社會問題の底に横はる制度の缺陷にまで及んでゐるのだ。あらゆる方面に新人の出現を待ち望んでゐた社會が、民衆の生活と最も密接な法律の學者に、この少壯氣鋭なる新人を歡呼して迎へぬといふ筈はなかつた。



大正十二年度の議會に提出された小作爭議調停法案は、殆ど全部わが末弘博士の起草するところであるといふ。

### 光輝ある敗北

「浦賀灣頭、一發の砲聲に、長き鎖國の夢破れて」壇上の青年はかう一氣に語り終へると、一寸口を切つてじろりと満堂の聴衆を見渡した。精悍の氣溢るゝとでも言ひたげな青年の顔は、燦として輝く電燈の下に、物凄程蒼白く見えた。先刻まで盛んだつた野次も、もう静まつてしまつた。聴衆は息づまるやうな沈黙の中に極度の興奮のため、かすかに痙攣する青年の口元をじつと見つめた。

——時は明治四十二年の春三月「今宵十九の記念祭」と若人等が口誦さむ第一高等學校嚶鳴堂に於ける第十九回記念祭の茶話會の宵のことであつた。青年は更に言葉を續けて、維新以來外國文化が滔々と侵入して來て、女尊男卑といふやうな我國古來の「諄風美俗」に反する弊風が盛んになつたのを慨嘆した。

「而もです」と彼は言ふ。「昨秋陸上運動會に際して、此の神聖なる一高グラウンドに婦人席を設けて婦人を優遇したのは何たる醜態でせうか。此の處置をとらしめた新渡戸校長の責任を私は問ひ度いのである。」彼はどしんと拳固で卓を叩くと、大見得を切つて一座を睥睨した——その青年こそ誰あらう。東大法科に學んで間もないわが若き日の末弘嚴太郎君であつたのだ。

彼の新渡戸校長攻撃演說會の要點は、新渡戸校長が八方美人的で、その前年一高で問題となつた栗野事件に關し文部省と學生との間に立つて兩方へ好いやうにお座なりを言つてゐるといふ點と、前年の運動會に婦人席を設けた事と、校友會費値上の一件だつた。その時末弘氏の味方をして飛び出したのは、當時まだ一高の生徒だつたこれも新人仲間の男爵石本惠吉君であつた。だが、この頃は新渡戸博士は辯論部を中心に、向陵一千の健兒崇拜の的であつたし、その上、當夜は辯論部の先輩青木得三、鶴見祐輔の兩氏をはじめ、一寸でも喋らなければ損をすると思得た連中が控へてゐたからたまらない。それらの連中が代る／＼立つて、末弘氏の誤解と、思想の未熟と、そして非禮とを責めたものである。そこ



で流石に負けず嫌ひの末弘氏も、すっかり苦境に陥つた所へ、最後に立つた新渡戸博士が  
 諄々として説くこと暫し、『私の覺悟はこれである』と懐中から取り出した半切に認められ  
 た歌を朗讀した。『見る人の心々に任せおき、高根に澄める秋の夜の月』

再び言ふ。『負けず嫌ひの末弘氏』がこの敗北にどれだけ苦しんだかは想像に餘りあら  
 う。だが、流石に彼は、自らの敗北を明かに認めるだけの勇氣と勇らしさをもつてゐた。  
 それから六月の試験まで、彼は眞蒼な顔をしながら勉強に没頭した。彼はこの不名譽を恢  
 復する爲に黙々として一心を勉學に傾注したのだ。かくして彼は見事に本望を達して首席  
 となり、秀才の名を得て今日の名譽を博することが出来たのであつた。青年容氣、未だ生  
 硬の域を脱し得ない時には、かうした敗北はありがちのことではなければならぬ。だが、そ  
 の敗北を勝利にまで生かしめる者は世に少い。わが末弘博士にしてよくそれを成し得たと  
 いふのは、博士の人物の特にすぐれたるところでなければならぬ。

### スポーツマンとしての博士

末弘博士は決して一介の讀書子ではない。その五尺の矮軀は、ハチ切れんばかりの精力  
 を漲らせ、絶えず自らの活動すべき天地を求めつゝある。その精力は何處から來るか？  
 その精力のはけ口であり、またその養成所でもある運動を、博士を語る際に落してはいけ  
 ない。スポーツマンとしての末弘博士はスキー、ゴルフ、フットボール、一つとして得意で  
 ないものはないが——博士は十四年度以來輕井澤に於けるゴルフの選手權を獲得してゐる  
 ——就中水泳と劍道とは、一流の腕前である。水泳は博士自ら『十八歳の一高時代から  
 先生をした』と語る如く、師範梅澤親光氏の後を襲うて師範をした位の達人である。それ  
 らのことは冒頭に掲げた逸話によつても、ほど想見することが出來よう。

劍道にかけても、一高東大に互つて相當幅を利かした方で、當時東大には佐々木、寺井  
 水野等の猛者が揃つてゐたが、その間に伍して博士は四級の上を使つてゐた。殊にその敏  
 捷隼の如き得意の拜み打ちには、曾つて東京大洪水の際、吾妻橋の上で、劍付鐵砲の兵士  
 十六名を相手にビール瓶一本で奮戦したといふ一高の豪勇佐々木保藏（現在辯護士）すら、  
 末弘博士の拜み打ちには常に參らされたといふことだ。劍道部では博士のことを小兵で精



悍のところから新撰組の土方歳三と紳名してゐた。

然し、こゝに一言しておきたいのは、博士の運動振りには、やはり博士一流の面目が躍如としてゐることである。その一つは時間を守ることが頗る厳格なことだ。學生時代東大水泳部で師範をしてゐた時でも、泳ぎの合間を他の連中のやうにトランプや駄辯で浪費するやうなことはなく、いつでも一人机に向つてノートと六法全書とを首引きして勉強をしてゐたといふことである。も一つは、萬事に徹底的な博士の性格と、物事を始める際にその眞髓を掴む鋭敏な頭腦の働らきとが出てゐることだ。剣道を例にとると、博士はより學生時代に居合を稽古したことがあつた。その時、博士は何時までか根本と云ふ型をやり抜いて行つた。といふのは、居合の根本は、刀を抜いて起つまでにある。起つてしまへば所謂擊劍となる。だから第一の型は抜打ちにして血ぶるひする。それが根本で、六十幾つかの種類があるが、他の一切の型は、皆これから派生したものだ。根本を會得すれば自ら派生原理も明らかとなる、學問研究でいふ第一原理である。そこで博士は毎日毎日此の第一の型だけをやる。他の連中も居合拔を始めた。二三日で器用に第一の型を覚え

次の型に移る。末弘博士は第一の型だけをやる。その間に連中は第二第三と、ドン／＼進むが、博士は一向に頓着しない。斯くして連中が後三日で型全部をあげてしまふといふ時分、幾ヶ月かの間、缺かさず一つの型を繰返しく／＼やり續けてゐた博士は最後に「もういゝ」と言つたと思つたら、それから三日か四日で、バタ／＼と六十幾つの型を瞬くうちに覚えてしまつて、連中と同時に型をあげ、而もその水際立つた腕の冴えは、師範も一寸近寄りかねる位であつた。流石に末弘のやりさうなことだワイと、友人連もその頭腦の良さを今更のやうに畏れたといふことだ。

### 旺盛なる活動力

かうした運動で鍛へた身體と、精力とが遺憾なく發揮されたのは、大震災の折、罹災者の保護事業に粉骨の努力を繼續して、立派な成績をあげたこともその一つであるだらう。當時、博士は東大の學生を中心に、罹災者情報局を設け、九月中旬から十月の下旬まで約五十日の間、不眠不休、元氣な學生達の先頭に立つて活動した。蓬々たる頭髮、汚れたワ



インヤツ、カーキ色のゲートル、そのプロ姿は野天で學生達と打合せ會をやつてゐるかと思ふと、自動自転車を飛ばして區役所警察署、さては深川本所邊の各救護所を馳せ廻り、或ひは賀川豊彦氏等と共に貨物自動車で市街を馳驅して配給品の指揮に當るなど、縦横に立ち働いた。それは氣の速い新聞記者には勞働組合の人が來てゐるのかと思はせた位だつた。

その後間もなく博士は自動車運轉手の試験に合格したが、著書の印税を投じてアームストロング十二馬力の最新自動車を購入し、「この武器さへあればうんと活動が出来る」と微笑みながら、相變らず小さい身體にハチ切れんばかりの精力をみせて毎日操縦しつゝ、社會の各方面にとび廻つてゐる。筆に口に社會的活動に、スポーツに、一日として安逸を食ふことのない矮軀に溢るゝ潑刺たる元氣は、始終何物かに向つて働いてゐる正宗のやうに冴えた頭腦をもつ博士をして遺憾なく活動せしめるのである。

### 秀才は秀才を識る

「私の學生時代に梅謙次郎博士といふ先生があつた。博覽強記その知見の範圍は専門の民法學に限らず、法律のことなら何でも知つてゐると言つた風であつた。而もその判断は明快暢達で、聞く者皆これに服するといふ風であつた。長友末弘嚴太郎君は、種々の意味に於て梅先生に似た所のある人だ」これは吉野作造博士が、末弘博士を評した一句であるが、實際末弘博士は法學全般に通曉するのみでなく、あらゆる方面に知見廣く、物を見るのに決して法律の一角からのみ窺ふやうな世間によくある偏狹な學者の態度はとらない。だからその意見は何人からも信服される。博士が少壯にして現代日本の法學界を代表せる觀のあるのは、思ふにさうしたところに因をおくものなのであらう。

博士の講義が學生から喜ばれるのも、博士が徒らに教壇に起つて理窟をこね返す學者でなく、燃ゆるやうな熱をもつて、學生が腑に落ちぬ點を極めて親切に、鋭利な頭腦で細くさばいて行くところにおのづから人氣が湧くのだ。博士は學生が生ける筆記機械になることを惧れて、決してノートをとらせない。本の蟲になつては不可ないといふ。そして力めて判例を説き、新聞記事などの生きた問題を解説する。水のやうに爽やかな聲で、どんな



難問でも快刀亂麻的にやつてのける。諧謔に富み『法律は人間の日常生活に離れて存在するものではない。圓滿な常識さへあれば、すべて解決される』と法律萬能論をコキ下すといつた鹽梅だ。博士の教を乞ひ、その學説をきくことを光榮に思ふ學生の多いのも故なきではない。

博士は、自分の門下より巢立ちして、社會の實生活にとびこんでゆく學生達に對して、次のやうな言葉を與へる。

『僕はたつた一言だけ諸君に言つておきたいと思つてゐる。それは頗る簡單だ。即ち秀才病に罹るなといふことだ。學校では澤山の人間の價値を定めるのに單なる試験の成績に據るより他に方法がない。ところが世間はなか／＼そんな單純なものではない。僅かに試験の成績がよいからと言つて學校内でチャホヤされる癖がついて、世間に出てからも當然さうした待遇を期待してゐると大きな間違ひである。秀才病の悲哀がそこに生れ、悲惨事を招來することが少くない。全く恐るべきものは秀才病だ』と。これが天下の秀才と謳はれて來た末弘嚴太郎博士その人の言葉である。秀才は秀才の何物たるかを識る。博士が一介

の秀才兒として止まることなく、今日われらの眼前にある如き一個の若き日本の代表的人物の一人として大成した所以は、語らずとも自ら明らかなることであらう。





不許複製

昭和八年十一月十日印刷  
昭和八年十一月十五日發行

「大學評判記」奥付  
定價一圓三十錢

著者 榛名讓

發行者 黑澤正夫  
東京市神田區一ツ橋通り三〇

印刷者 鷺見知枝齋  
東京市芝區西區松町一ノ一五

發行所

東京・神田一ツ橋通り  
鷺見知枝齋  
電話九段(四)一五五

日本公論社  
振替東京六〇七三一

(納本製器局)

刷印堂友文見鷺



文學博士 松原 寛著 (四六上巻) 定價 一・八〇  
送料・二二

# 生活の哲學

現代民衆の生活の聖書！  
偶像の哲學、死の哲學を葬れ。  
本書は著者が敢然と起つて、今や全く  
生活の標識を喪へる非常時日本の民衆  
の「生きる光」を投げ與へんとするも

マーンソン原著 野阿千伊譯 (四六上巻) 定價 一・六〇  
送料・二〇

# 山の科學小説 モンブランの乙女

〔版八忽〕  
歐米讀書界を壓倒せる驚異の山岳小説  
アルペンの可憐な少女に彩られた、白  
皚々の雪峯、星明りの氷河、アイヌス  
ロープに振ふピツケルの響、雪崩れの  
遭難、氷稜絶壁上の殺人等々や如何に。

奉天滿洲日報編輯局長 田原 豊著

# 滿蒙の謎を解く

〔刊新〕  
滿蒙の民情、風俗、習慣を  
説いた興味津々の快著  
價一・二〇  
送料・二〇

永樂證券社長 北条傳四郎著

# 公社債投資讀本

〔版五廿〕  
安全・確實・容易な理想的  
新利殖法の解説  
價二・五〇  
送料・二四

庶民金融研究所 井關 孝雄著

# 金融の魔術

〔刊新〕  
質屋・高利貸・ニコク・モ  
リス・無盡等赤裸々な検討  
價一・八〇  
送料・二二

日本法律知識 普及會 編

# 契約書式總覽 全

〔版再〕  
民法・商法その他の合法的  
契約書式例を悉く收む  
價二・〇〇  
送料・二二

野村英二著

# 醫業經營論

〔刊新〕  
新時代に適應せる醫業經濟  
確立の根本策を詳論  
價二・三〇  
送料・二四



281

37



